

NPO法人アパリが提供する 保釈中の刑事被告人に対する 薬物研修プログラム



ミーティング終了時の祈りの風景。保釈中の被告人が施設の回復プログラムに参加している。
(2002年8月)

NPO法人アジア太平洋地域アディクション研究所

(Asia-Pacific Addiction Research Institute 略称アパリ)

では、薬物事犯で逮捕・起訴された刑事被告人に対し、薬物依存の恐ろしさを教えて断薬・治療・回復への動機付けを促す薬物研修プログラムを実施しています。

薬物事犯の再犯率は高く、50%を上回るといわれています。当法人ではこれまでの2年半の間に20名の刑事被告人の方々にこのプログラムを受講していただきました。その結果、当プログラム受講者についてはこれまでのところ再犯者をひとりも出さないという実績を築いています。提供している私たち自身にも、この数字に驚きを禁じえないというのが実情です。

(詳細は14ページの論文をお読み下さい)

目次：

薬物研修プログラム	1
若き同士に告ぐ 近藤恒夫	2
フェローシップ対談 家族はアディクションの 発生装置！？ 信田さよ子&西山明	4
保釈中の刑事被告人に対 する薬物研修プログラム 尾田 真言	14
体験談	17
家族の手記	18
アパリ藤岡見学記 自己を見つめる男たちの 姿は美しい 五條しおり	20
薬物依存症 回復のチャート	22
サルでもわかる アディクション講座	24
ラブ&マーシー 神無月 才生	26
ネコさんに学ぶ 安高真弓	27
アパリ藤岡 アウェイクニングハウス	28

アパリの フェローシップへ ようこそ！

アパリとは
アジア太平洋地域
アディクション研究所
(Asia-Pacific Addiction
Research Institute)
の略称です。

D.A.R.CやM.A.C.をはじめ
とする全国のアディクション
(依存症)回復施設、教育・
医療・司法関係者と連携しな
がら、アディクションから回
復しようとする仲間たちの手
助けをしているシンクタンク
です。

若き同志たちに告ぐ

東京・日暮里で薬物依存者の回復施設「DARC (Drug Addiction Rehabilitation Center)」を立ち上げてから18年目の幕開けを迎えた。横浜や名古屋を皮切りに、DARCの卒業生たちが次々と各地域のDARCを旗揚げして、全国のDARCはいまや28団体にまで増殖した。刑務所や病院の入退院を繰り返し、地域からも学校からも家庭からも厄介者扱いされて居場所のなさに苦しんできた仲間たちが、自分たちの編み出したプログラムに従って回復の道のりをあゆみ、新しい仲間の手助けをしながら、社会に貢献する者としての誇りと自信を再生している。こうした仲間たちのネットワークが全国に拡大していく。これは文句なしに素晴らしいことだと私は考えている。

私たちはアディクションという病を抱えて生きている。アディクションとは、こころの病である。「寂しさの痛みの病」という言葉で私は説明している。人間関係をうまく結べないことから生じる寂しさや、こころの痛みに自分の力では向き合えなかったアディクトたちが、酒やクスリの力を借りて日々をどうにか生き延びる。そして、底をつく。そんな過去の生き方を捨てた私たちは、今日一日を新しく生きるプログラムを選択した。施設に入寮し、自助グループに通い続けて仲間を作り、回復への道のりを歩み続けている。

幸か不幸か、私自身の回復の道程は、DARCの活動と共にあった。これは神のめぐみとして有り難いことではあったが、その反面、人間の私には苦しいことであった。

「あんたらに、俺たちの気持ちが分かってたまるか！」

DARCの活動を始めてから今日までの私の気持ちは、この一言に尽きるのかもしれない。

薬物依存者をさらにクスリ漬けにして保険点数を稼ぐ医者たち。病気の治療よりも司法処遇を重視する裁判官。生活保護申請に露骨な嫌な顔をするケースワーカー。行政の担当官は、助成金申請にケチばかりつける。そして、自分たちの生活の不満を施設への反対運動にこじつけて、いきり立つ地域の住民たち。アディクトを単なる落伍者として決めつけ、その回復支援には関心のかけらも示さない世間の一般常識に対して、言い知れぬ怒りばかりを抱えてきた。全国のMACやDARCのスタッフたちも少なからず、私の気持ちと同じようなものを感じてきたに違いない。

片親にしか愛されなかった淋しさ。肉親に疎まれ、殴られ続けた痛み。生まれ持ってしまった「こころの不全感」か

近藤 恒夫



近藤恒夫（こんどう・つねお）。アパリ副理事長、日本ダルク代表。民間の薬物依存リハビリ施設「ダルク」創設者。自らの薬物依存体験を生かしてアディクション問題の啓蒙活動に奔走している。1995年東京弁護士会人権賞、2001年吉川英治文化賞を受賞。

ら、少年期にも「さびしさの痛み」を抱え続け、気がついたときには薬物や酒の泥沼に落ち込んでいる。薬物や酒が、さらなる悪循環に私たちを陥れていることに気づくことも出来ぬまま、どん底まで転げ落ちていく。そんな私たちアディクトの気持ちは、アディクト同士でしか決して分かり合えないものだった。仲間の訃報の前に途方に暮れながら、なぜ彼（彼女）らが死ななければならなかったかを考え続けた。

DARCの活動が多少は社会に認知され始めた現在でも、根本は変わらない。アディクトと健常者の壁は歴然と存在している。アディクト同士、自助グループの仲間同士なら説明すらいらないようなことが、健常者の前では、どんなに言葉を尽くしても伝わらないことがある。「孤独感」「疎外感」「不全感」などと言ったところで、分からない人に対しては、まったく通じない。それは仕方のないことだ。家庭環境に恵

まれて何不自由なく育った健全な人たちと、私たちとは、スタートラインからして違うのである。それを恨んでみても無駄というものであろう。

ただ、時代は変わってきた。厚生労働省は「薬物依存・中毒者のアフターケアに関する研究」の分担研究者として私を招いて下さったし、昨年六月には衆議院の青少年問題等特別委員会の参考人として国会に招かれ、大勢の国会議員の前で話をする機会も与えられた。薬物依存症の治療に積極的に、自助グループや中間施設と提携して下さるドクターやワーカーさんたちも増えている。APARIでやっている保釈中の教育プログラムを受講した被告人に対し、一定の理解を示してくれる裁判官も現れ始めた。私たちアディクトの言葉に耳を傾けてくれる姿勢が、社会の側にも少しずつ醸成されてきたように思う。

こうした時代を迎えたいま、回復者（リカバード）スタッフとしての私たち自身のあり方も問い直されてきているのではないだろうか。

社会の側に、私たちと共生する機運が育ちつつある現在、私たち回復者の側がそこに甘んじているだけでよいのだろうか。私たち回復者は、自分たち自身のあり方を常に謙虚に見直しながら、仲間の回復支援に関わっていかねばならない。今日一日の課題に真剣に取り組んで切磋琢磨し、理解者や支援者と手を取り合って活動していかねばならない。

昨年11月24日から3日間、東京・代々木で開かれたジャパンマック主催のワークショップで、講師として来日したジェームス・バルマー氏の講演に私は胸を打たれた。アメリカ屈指の回復施設「ドーン・ファーム」の代表であられる氏は、回復者でありながら、心理療法家としての専門トレーニングをこなし、アメリカのアディクション業界の指導者的存在となられた人だ。バルマー氏だけではない。欧米のアディクション回復施設では大勢の回復者がスタッフとして働いているが、そのほとんどが心理療法や作業療法の専門家としての知識と技術を学んでいるという。

垂水病院の麻生克郎先生の資料によると、NAADAC（全米アルコール症・薬物乱用カウンセラー協会）の認定制度には、アルコール・薬物カウンセラーとしての6000時間以上の臨床経験や、嗜癖カウンセリングに関する270時間以上の教育トレーニングを受けることなどが盛り込まれている。

現状では、日本にはアディクションからのリカバード・カウンセラーの認定資格制度は存在しない。施設でクリーン生活を保持できた回復者が、施設の先行く仲間の導きでスタッフとなり、後からきた仲間の手助けをしていく。これまでは、それはそれで美しいやり方であった。しかし、社会の側

が私たちに胸襟を開いてくれ始めた現在、私たちの側にも質の向上が求められるのは当然だ。近い将来、日本にも認定資格制度が出来上がるだろう。アマチュアボランティア精神だけでは通用しない時代がやってくる。ビョーキ大国・アメリカの認定制度のハードルの高さは、いかにもアメリカらしいと驚かざるを得ないものの、私たちだって常に努力して向上していかなければならないはずである。

高校を中退して勉強から遠のいてしまった仲間たち。むずかしい活字をにらむと発作的に欲求が出てしまう(?)仲間たち。私もまさにその一人だ。昔も今も、机に座ることが大嫌いだ。みんな、それぞれ事情はあることだろう。しかし、そんな私たち回復者でも、その気にさえなれば勉強できることが幾らでもあるはずだ。

AAやNAの文献を読むことから始めてもよい。本を読むのが嫌いなら、アディクションに関するさまざまなフォーラムやワークショップに出かけてみてもよい。自分自身の回復のためにミーティングに通い続けるのはもちろんだが、ときにはプロの援助者のカウンセリングを受けてテクニックを学んでみることも必要だろう。

「回復とは何か?」「人間のこころとは?」「ひとが生きることとは?」

自分の回復とともに、そういう問題を常に己に投げかけ、施設や仲間内での役割を通じて、その答えを模索し続ける。それが私たち回復者の生きた勉強であるはずだ。

「どうせ、俺なんか・・・」と背を向けるのではない。できることから始めていかなければならないのである。

社会の側に理解と協力を求めるばかりではダメだ。DARCの看板を背負う私たち自身が向上し、変わっていかねばならない。そして、私たちDARCのスタッフは「自助活動」を柱としていることを忘れないで欲しい。国家や権力の指導で再教育されるのではなく、私たちは私たち自身の力で、自らを磨き、高めていかねばならないのだ。

さまざまな専門職の方々と肩を並べて仕事をするだけの技術や能力を身に付けたときに、私たちの生まれ持っている武器が、光ってくる。

言葉にならないレベルでの、同じ痛みに対する共感能力。

それは、私たちアディクトだけが持っている比類なき強みでもあるのだ。

「あんたらに、俺たちの気持ちがあつたまるか!」

私たちがたゆまぬ努力を続けていく限り、頭の固い医者や裁判官を揺るがすだけの力を、この言葉が持ちうる時が、かならずやってくるだろう。

フェロシップ対談 家族はアディクションの発生装置！？

信田さよ子さん（原宿カウンセリングセンター所長）& 西山明さん（ジャーナリスト）

西山 創刊記念対談はアパリ副理事長・日本DARC代表の近藤恒夫さんと私に対談をして、男たちには援助を求める能力が育っていない、という話に落ち着きました。自ら援助を求めていくということができない、そういう現実があると。特に男社会の中にあるというところで終わりましたね。

司会（富永） 男たちが援助を求めていくことが、チェーン・リアクション（アディクションや暴力の世代間連鎖）を断つことにつながっていくという話でした。

西山 今回は対談相手としてカウンセラーの信田さよ子さんに登場していただきました。アルコール依存の回復施設マック、薬物依存の回復施設ダルクやアパリが生まれて実績をつ



信田さよ子（のぶた・さよこ）さん。お茶の水女子大哲学科卒業、同大学院修士課程（児童学）修了。原宿カウンセリングセンター所長。臨床心理士。著書に「DVと虐待」（医学書院）「依存症」（文春新書）ほか多数。

くっています。薬物の問題で言えば、日本では薬物依存者には法違反による処罰として刑務所送りにするという対応がとられている。だけど実際、どうやって回復していくのか。刑に服したあとの回復への道筋としては現在、ダルクやアパリの組織が唯一あるわけだね。薬物の繰り返しを断つことができるか、ということが、大事な問題でもあるわけだね。医療の手立てや法律の処罰で繰り返しはとまるのか。実はとまらない。ま、実際は、そうっていない。回復の手立てを、薬物の領域からさらに広げてアディクションの世界から考えていけたらいいかなと、こう思っているんです。できれば医療の世界にいる医者とは違う視角から考えていこうということですね。信田さんの面白味は人間の関係性の問題というのを大変、重視していることなんですね。私たちが困難に陥ったときに人間の関係の問題である場合には、関係性の障害なら取り除くことができるかもしれない、関係を変えることで障害を取り除くことができるかもしれない、そういう希望は持つことができます。そんな意味で今回は信田さんに対談の相手を選んだのです。もうひとつやっぱり、僕自身がアディクションを系統的に考えることができるようになったのが「アダルト・チルドレン」という言葉を実体として手に入れたからなのです。『アダルト・チルドレン』（三五館、集英社文庫）で信田さんと長期間にわたり対談をすることによって整理することができたんですね。それがフェロシップ対談の2番手に選んだ理由なんですね。それで、今日はアディクションの問題について考えていきたい。信田さんにとってアディクションが現代社会の大きなテーマとして浮上してきた、という見方があったら、そのところを糸口に議論をしていけたら、というふうに思います。

信田 2回目の・・・あっ、3回目の対談ですね。

西山 はい。そうですね。

信田 二人の対談集『家族再生』（小学館）以来・・・今、西山さんもおっしゃったように、アディクションっていうのは、特に薬物っていうのは、司法と医療の谷間にある人たちこそが、鍵を握ると思っているんですよ。それは学校とか、地域社会であったり自助グループであったり、アパリのような団体であったり、はたまた私たちのような、医療を離れて援助活動をしているカウンセリング機関であったり、ジャー

ナリストの人であったりとかね。つまり、病院や刑務所も必要ですが、それを使うのは私たちである。選択の主体をね、病気とか犯罪とかいう言葉から「奪還」しないといけないと思うんです。オーバーに言えばですね、アディクション観を構築したいと思っています。私たちはこれまで実は鬼っ子だったわけですよ。病院にも属さない、刑務所や少年院のような公的機関でもない。なんの権力もない私たちね、それらの谷間に生まれた自助グループやマック・ダルク、アパリとか私たちのような民間機関こそが21世紀にはアディクションの回復を左右するんじゃないでしょうか。特に家族へのアプローチにおいては、決定的な役割を果たすようになりたいって、これが今、私の一番の望みなんです。ですからこういう対談に選ばれたっていう事は大変名誉で、光栄なことだと思っています。

「暴力」と「救済」

西山 そうするといま、アディクションということを考える時、信田さんは家族ということへのアプローチが基本と考えていますか？

信田 そうです。アディクションといたら家族です。私たちの相談システムはそれを基本に組み立てられています。理屈っぽい話になりますが、先程の、援助希求をしないという人たちの典型は、男も女も実はね、アディクト本人なんですね。自分のアディクションについてはだれにも話したくないわけです。だから、家族が困るわけですよ。家族がなんとかしようと思う。「アルコール問題は家族から」というのは、1970年代からの一つのテーゼだったんですよ。周囲の人がまず困るっていうのがアディクションの常態です。そのとき、困っている人たちをまずどう援助するかということ、私たちはやってきたんです。そうするといろんなことが見えてくるんですね。先程の話でちょっと引っかかっているのはね、援助希求能力のなさという、一般論的な男性の能力不足と、アディクションの人たちが、ちっとも自分から援助を求めないことは、なんかどこか似ている。そのキーワードは「セルフ・コントロール」だと考えています。「セルフ・コントロール」ということの重要視そのものが、そもそも幻想に基づいているのではないかと。・・・しかし、それはかなり難しい話になるので、とりあえず置いておきましょう。

なぜ「家族から」と考えるかということ、本人がその気にならないから、ということだったんですよ。その気にならない本人たちをいかにして、その気にさせていくか、ということが、家族への介入の基本の「き」。で、その気にさせるっていうのはどういうことか。それは困らない人を困るようにさせる、ということですね。そうすると、すごく面白いことが見えてきます。

家族というのは実は、アディクションを発生させ、先鋭化しアディクションを支えている組織体みたいなところがあるんですね。そういう家族像がアディクションに関わっていて見えてきたんです。たまたまそこに「運よく」アディクションが発生すれば家族の見直しができるでしょうが、そうじゃない家族は相変わらず「ウチはいい家族です」って言って、そのままの家族を続けていくでしょうね。もうちょっと言うと、私が家族を見ていて、アディクションの発生源として見えるものはですね、やはり「支配」っていうものです。で、その「支配」というのは、ちょっと抽象的なんですけど、親が子どもを「こうでなくてはならない」というふうに、その正しさを疑いもせず子どもに強制していくことが、ひとつは考えられますね。もうひとつはものすごく単純明快な「暴力」です。暴力を受けた人がいかにアディクションによって救われるかですね。これは具体例を話してもいいんですけど、私は、アディクションっていうのは暴力被害の「救済」なんだなって、最近すごく思うんですね。だから、アディクションで確かにいけないことって思われるんだけど、先ほど西山さんも「病」っておっしゃったんだけど、私はあんまり「病」という風にも考えないですよ。救済がある日自分を裏切るというような・・・こういう、非常にパラドキシカルなもの、というふうに考えると、とっても文学的なんですね。ですから、私は家族をみるときにひとつは目に見えないコントロール、支配というものと、もうひとつは単純明快な支配としての暴力と、この2つが、家族の中のアディクション発生源としてあるんじゃないかというふうに思います。

西山 強制の場合ね、これが何か明快な強制であれば分かるんですが、たぶん、家族内部の子どもの側からすると・・・なんていうのかな、「お前はこうしろ」って命令されて、抵抗するという図式的ではなくて、抵抗の根を奪われるようにして、自分から自然に屈していく・・・もっと明快に強制が出てくると・・・子どもって、少なくとも抵抗できるポイントに立てるんだが、強制というのが、もうひとつぐらいねじられていて・・・複雑に人を「からめ取っていく」と考えるんですね。親子なり、夫と妻、恋人との関係もそうですが、相手は自分が悪いように仕向けていく。こう・・・崩れ折れさせるよう、ひざまずかせるように、いつのまにか、持ち込んでいくんじゃないか、と。たとえば命令ということが目に見えてストレートであれば、「支配」ってものが見えるんですが、そのへんのとこがもっとこう・・・いちがいに言えないところがあって。多くの人が、「家族の中に支配がある」って言ったときに、たぶん、親の側からしたら「支配なんかしていない」と、こう言うと思うんですね。

信田 親はみんな言うね。

西山 つまり支配がある、つまり強制していることを、分かせないようにやっている目に見えない力、あるいは力を使用する際のフィクションが、家族の中にあるんじゃないか。

そここのところを見ないといけなかなと思うんですね。

信田 うん。私がアダルト・チルドレンという言葉から学んだ一番の大きなものですね、家族の間で起こっていることは夫のとらえ方と、妻のとらえ方とでは、まるっきり違う。親のとらえ方と子どものとらえ方も、まったく違うっていうことでしたね。いま西山さんがおっしゃったのがとてもいい問題提起だと思うのは、親は愛情だと思っているんですよ。それを、全て愛情だと思ってるんです。殴ることも含めて。ところが子どもにとってみると、それはなんだか、いまおっしゃったように、力が奪われていくようで罪悪感だけが降りつもっていくような、そういう感覚を醸成するもの、なんですね。ですからそのときに、私たちはやはり子どもの側に立たなければいけない。親は自分がやっていることをたぶん自覚しないかもしれないけども、その支配の装置を解読する、あるいは言語化していかなければいけないというふうに思いますね。で、私、そのカラクリは、かなり分かってきたんですよ。

西山 ええ。

親が子をからめ取る

信田 P.T.S.D.という言葉を使っちゃうと4文字で済んじゃうんで私、あんまりその言葉使いたくないんだけどね。ひとつはね、原点であるアルコール家族の父と母と子、という3人を見ると非常によく分かるんですよ。それは父に支配される母。支配されて不幸で、子どもに救いを求める母。で、母を救わなければいけないと思いつつも、父と同じ性である息子。・・・っていう、たとえばこういう三角形を考えたときにね、その子どもは「罪悪感」なくして生きられないんですよ。目の前で苦しんでいる母をそのような状況に置いている自分、まあ女の子でもそんな変わらないんですけど、子どもってというのは最終的な家族の幸せを維持する存在としてあることを引き受けるしかなくて、自分がそれを維持できないことに日常的に罪悪感を抱く。これがひとつ。

もうひとつは、非常にうまく「からめ取る」。そんなからめ取り方があるんですね。そのやり方は、からめ取る側が主体を消しながら、からめ取るんですね。それはね、なんていうんですかね、こう・・・「取りつく」とか、「のしかかる」とか。「のしかかる」ってのはまだ主体があるね、重さがあるから。「取りつく」っていうと、「ヤドリギ」みたいなね、で・・・その、子どもの人生に、ピチャッと取りついて、その、「あなたのためですよ」って言って取りついて、養分をずうっと吸っていく。すると子どもは自分が生きる、ということと、親に養分を補給する、ということと、同義になる。自分が人生を生きているのか、親の人生を生きているのか、その間の境界が非常に不分明になる。これが、取りつ

く人の目的なんですね。つまり2倍人生を生きる。取りつく相手が2人いると、3倍生きられる、もしくは彼女が・・・ま、彼女って言っちゃったんですけど、彼女が自分の人生はもうどうでもいいと思っていると、自分はゼロで、子どもに取りついてやっと1人前、という風に思っているのかも知れないですね。取りつかれる方してみると、絶えず奪われ続けるわけですよ。自分が大学に受かる。するとまた、奪われるでしょ。で、いい会社に入る。また、奪われるでしょ。するともう、自分はその・・・お婆さんの、根っこのところでハイポネックスみたいに、肥料をやりつづけてんのか、みたいになってくる(笑)。これが「奪われる」という構造じゃないかなと思う。罪悪感を抱く、一方で絶えず収奪される、という感覚、この2つがあるんじゃないですかね。それに比べると暴力は非常に簡単、というか。

司会 あの・・・ちょっと、お聞きしたいんですけど・・・

信田 うん。どうぞ。

司会 今のヤドリギの話をお伺いして、僕、自分の経験が少し理解できたんです。僕の別れた妻は、やっぱりそうだったんですね。前妻のお母さんがお父さんにまったく満足していないで、すごく不満を感じながら仮面をかぶって生活していて・・・彼女(前妻)けっこうキレイだったんです。それで、彼女がモデルクラブに所属したりとか、女優の卵をしたりとか、そういう生活をしていることを、父親はすごく嫌がるんですが、母親はどんどん応援する。母親は、僕の中から見ていると、娘の人生をもう一回、生き直しているなっていうのを常々、感じていたんですよ。前妻が僕と出会って結婚生活が始まってからも、僕の家でどんどん何もかも色々なものを送りこんできて、しまいには自分までしょっちゅう遊びに来たりして、僕と彼女の結婚生活をまるでヒナ段の飾りピナを鑑賞でもしているかのような感覚でもて遊んでいたんですね。それがすごくウツウシかった。別れた妻は、そんな母親の存在を表面的には嫌がったりするんですが、深層では母親の言いなりになるしかない。それで、結果的には母親のお膳立てのようなことばかりしてしまう。僕がクスリで潰れてからは、彼女は実家に帰って、僕の子どもたちを実家で育てている。いま、彼女たちはどうしているか、没交渉なんですけど・・・きっと、苦しんでいるのではないかと思います。

信田 おそらくそのお母さんは、孫をまた、対象にしているでしょうね。

司会 まちがいなくそうしていると思います。

信田 どうやったって生きられるね(笑)

司会 もう少し続きがあるんです(笑)。彼女は、いってみれば、僕との家の中ではバタラーだったんですよ。

信田 うん、うん。

司会 僕に暴力ふるったって体力的には勝てないですから、精神的に僕を痛めつけてくる。僕はものすごい自分をおさえちゃって、彼女に隠れて陰でクスリをやりながら、彼女の前

ではニコニコしていた。彼女を受け止めよう、受け止めよう
と無理していたんですね。

信田 うん。

司会 彼女は暴力のふるい場所がわからなくてカナヅチでテレビをぶっ壊しちゃったりとか、滅茶滅茶になっちゃって、子どもも愛せなかった。その怒りを彼女自身が抱えている。どこに向けていいのかも分からない怒りであるということ直感的に僕は分かっていたんですが・・・やがて僕は、ワーカホリックとクスリでおかしくなっていく・・・僕自身のアディクションの原点にも、幼児期に受けた虐待からの怒りがありました。しかし僕自身も、その怒りをストレートに親にぶつけられなかった。彼女も、自分の怒りを自分でどうすることもできない。さらに僕のクスリの問題では共依存まで抱え込んでいく。一緒に暮らしていた頃は、ホントに苦しかったですね。

信田 ふうん。

司会 あのときの彼女の苦しみの一因が、なぜだったのか、すごく解けた気がしました。それともうひとつのケースは、最近僕が関わっている、いま回復中の仲間なんですけど、薬物依存症なのに、精神科クリニックの処方薬漬けにされている。ベゲタミンとかサイレースとか・・・完全にヨレちゃっているんですけどね、彼のお父さんが格闘家なんですよ。

信田 ほう。

司会 話を聞いていると、お父さんから子どもの頃、かなりボコボコにされているんですね。感情的にしつけられている。ところが息子の彼は、お父さんを憎めないんですね。尊敬しちゃっているんです。

信田 うん、うん。

司会 その・・・彼が・・・僕もどうもうまく言葉に出来ないんですが・・・その・・・分かるんですね。お父さんを、もっとストレートに憎めれば、すごく落としどころがあるかもしれないのに、表面的には尊敬してしまっていて・・・

信田 うん。

司会 なんて自分が薬物依存症なのか、クスリが止まらないのか分かんないまま、抑鬱もでたり、すごく苦しそうで。

信田 うん。

司会 ミーティングに参加しても、なかなか安定しない。そのお父さんも、彼の話を知っていると、自分の価値観をこの息子に・・・ひとり息子なんですけどね。幼い頃からずーっと・・・その重圧はかなりキツかったんじゃないか、と知っているんです。アディクションを持つことで、そういうことから彼はすこし救われていたのかなあ・・・と、お話を聞いていて思いました。

罪悪感と収奪



西山明（にしやま・あきら）氏。ジャーナリスト。通信社記者として少年問題のフィールド・ワークを続けている。1995年「アダルト・チルドレン」（三五館、集英社文庫）が広く読まれている。現在、共同通信社甲府支局長。

信田 うん。非常に具体的で、よくわかる事例ですね。でも薬物っていうのはアルコールとちがって、やっぱり確信犯的ね。あえて火中の栗を拾う、一種の反社会的行為じゃないですか。いくらブロン（注）であってモね。だからそういうことで多分、西山さん流に言えば、反抗というか、やっぱり親への反抗の意思表示ですよ。そういう意味でアルコールとちょっと違うと思うんですよ。女の子のアルコールは抜かしとして。女でアルコールを飲むということが、ひとつの反抗の意味を持っていたんだけど。今はもう、持たなくなっていて・・・そういう意味では思春期の親との関係において薬物問題は象徴的ですよ。何が何だかわけが分からないっていうときに薬物っていいんですよ（笑）。私が言っちゃなんですけど、いいですよ（笑）すごく、明快になるんですね。だから、本当に薬物の回復っていうのはもちろんクスリをやめていくことだけど、回復作業っていうのはその、何が何だかわかんなかったんだけど、薬物がすごく救いだったっていう、そのわけがわからなかった状況をね、やっぱり回復のプロセスで、少しずつ整理していくっていうんですかね。

「あ、こういうことだった」というのは、絶対に必要ですよ。うーん。

司会 それはやっぱり、ミーティングで話す、という行為であるわけですね。

信田 そうですね。仲間の話を聞いたりね。

西山 富永くんの事例を聞きながら「憎悪が言語にならない」ということを考えたね。憎しみがね、ちゃんと父に向かえば「父親殺し」になる、犯罪として父を殺す、というか。そういうところまで、行きつく。でも現実にはたぶん、そうはならない。格闘家の父を憎めない私、というのはどうなるのか。取材した父親殺しでは、ストレートに父を憎めている。最後は恐怖だね。これ以上やられたら身がもたない、そういう恐怖感で父を殺していくということがいくつか、あると思うんだよね。で、憎めない私というのは大変苦しいからね。さっき言ったように、薬物の世界にハマったりね。

もうひとつ、「家族内」から「家族外」に向かう殺人がある。たぶん、父を憎めないけど憎しみの感情がある。その対象が見えなくて対象が外に向かう。ある意味で池田小学校の児童殺傷事件の宅間守被告なんかもそうだった（注）かもしれない。少年事件でも、本当は父を殺せばいいのに、父を殺せないで、他者を殺していく。つまり「父を憎めない」自分に育て上げられたというのが、さっき信田さんが言った、親がからめ取るということの結果的な姿ですね。子どもを強制的にからめ取って親が奪っていく。そうすると・・・

司会 （膝をのりだして）そうなんです。親は本当にうまいんですよ。

信田 うまいよねえ（笑）あれは本当に盗みたいテクニックですよ。組織でも、憎まれずにうまく人を使うテクニックとして（笑）

司会 すごくうまくて、だから子どもにしてみると、たとえば・・・ある日はうまく憎めて正直な感情が出せても、その揺り返しが必ずきちゃうんですよ。

信田 そう、そう。アッハッハ・・・

司会 ああ・・・自分はひどいことをしたって、すごく心を痛めてしまって・・・親はまた、子どものそれをうまく引き出すんです。悲しそうな顔をつくったり（笑）それで子どもはまた自分を責める。それがまた憎しみにかわってまた揺り返されて・・・すごく苦しいんです。薬物をやってきた側から言わせてもらおうと、その苦しみを全部消してくれるのに、クスリほど効果あるものはない（笑）

信田 そうよねえ、本当に・・・あんないいものはないよねえ（笑）すべて、明快、一点のくもりもない、という感じだものねえ。

西山 それはよかった、薬物があってよかったねって（笑）

信田 それはみんな、そう思っていると思うのよ、私は。

西山 その、かすめ取る、からめ取るというところがね、親からすると、よく分からないところですね。私はそれを「自

尊心泥棒」というね、ネーミングをしたんだけど。子どものために頑張っている親に向かって泥棒なんてけしからん、というクレームがいくつもありませんね。あのう・・・かすめ取っている泥棒が泥棒として認知しない。そういう構造になっている。それはさっき言ったように、日本の家族という仕組みを支えているフィクション、親は子を思って当たり前で、愛情をもってやっているっていう、そういうフィクションを打破できない壁が子どもの前に・・・あるんですよ。家族が持っている神話性みたいなもの、親はこうあるべきだ、とか、子はこうあるべきだ、とか、そういう、関係性がつくる神話性みたいなものが機能して子どもの自尊心を奪っていく。それだからこそ泥棒ということが見えてこない。そのところが信田さんがさっきいったような「罪悪感」と「収奪」ということと重なり合うのかしら。暴力の発生とも関係してくるかなって思いますね。

信田 と、というのが西山さんの当面の問題意識ですね。

西山 はい。暴力は、少年たちをみていくと、自分の置かれた状況の主な原因、あるいは憎しみの対象が明快になったとき家族内部の殺人事件が起きてくるんじゃないか。対象が明快にならない故に、殺人事件、家族内殺人がうまくおさえ込まれて、アディクションの世界、クスリやアルコールに向かうのじゃないか。そういう仕掛けになってなっているのかなというふうに思いますね。

アディクションは延命策

司会 先ほどおっしゃったセルフ・コントロールっていうことが気になっていまして。質問していいですか。他人をコントロールすることについての無力については、自助グループのステップなどからつくづく学んだつもりですが、自分自身のことに関しては、どこか自分は有力でいたいっていう気持ちがいつも、拭えないんですね。

信田 もちろん。それは分かりますよ。自助グループ内でのスポンサー・シップってあるでしょう？あれも一種のコントロールですよ。あのコントロールと、ミーティング場での仲間へのコントロールは違うはずなのに、そこがしばしば混同されるよね。説教しちゃう人がいる。とくにAAのおじさんたちに多いみたいね（笑）。

司会 ぼくは個人的には、ソーバー何十年のおじさんに説教されるの好きですけど（笑）。しかし、ミーティング場に通い続ける努力と、自分を自分でコントロールしていく努力とそこの違いがよく分からない。ぼくはいつも頑張りすぎてしまみたいで仲間にも叱られます。

信田 ミーティング場に通い続けて、日々クリーンを続けることの努力や意志と、日常の自分が生きていくことに関する意志というものの区別は結構、むつかしいんです。それを支

えるのは、仲間だと思う。自分ひとりでやっちゃうと、その2つはね、全く同じになるんですよ。なんて言ったらいいのかな・・・大きな船に向かってるハシケみたいなものね。回復に向かう初期の努力は、ハシケに乗って頑張ってみてもいいんだけど、ある程度たって大きな船に乗れたなと思ったら、あとはゆったりと「お任せ」するのよ。その区別を教えてくださいなのが仲間ですね。それから、スリップしていく人たち。そういうものじゃないかなって私は思いますね。

司会 スリップする仲間の存在が教えてくれるものは確かに大きいですね。・・・あと、スリップじゃなくて最近ではリラプスっていうらしいですよ。

信田 いつから変わったのよ。再燃っていう風にしたの？

西山 どういう字を書くの？

信田 (ホワイトボードに「RELAPSE」と書いてみせる)

西山 ああ、リ・ラ・プ・ス、か。

信田 リラックスだと思ったの？

西山 リラックスって聞こえたから、何かと思った。

一同 (爆笑)

司会 NAの翻訳委員会で決定したんでしょう。

信田 やっぱりAAとは違うかもねえ。AAとNAは、一緒じゃないからね。AAはスリップっていいいますもん。滑って転んだだけだって。よくオープンにできたねえって言うんだけど、薬物はたぶん、それだけ吸引力が強いんだねえ。

司会 使えば死ぬ人たちの集まりですからねえ、ある意味。

信田 ああ、そうか。それは面白いねえ。薬物とアルコールの違いだねえ。

司会 すいません、対談の腰を折ってしまったみたいで。

西山 いやいや。もう・・・いいのかしら(笑)？

司会 はい、はい。落ち着きました(笑)

西山 そうか(笑)。で・・・さっきの話の続き、家族の強制、支配と暴力のところに戻りましょう。からめ取るっていうことを・・・

司会 西山さん、すいません。その、からめ取るっていう件についてなんですけど、もう一件だけ、信田先生にお聞きしたいことがあるんです。からめ取られている当の子どもが、そのからめ取られているパワーを、飛び出すなり、その仕組みに対抗する、あるいは破壊する、そのためにはどのようなアクションが可能なんでしょうか。

信田 それを今、西山さんが話しているわけよ(笑)。その一つはね、対象がね、憎悪として一人の人間に向かえば殺人になるだろうし、家族の中で対象が決まらないときに、家族外の他者への暴力とか殺人になるかも知れないし、ときにはそれをハッキリさせるためにクスリに行くかも知れない。そういう風に考えると、暴力の発生とかアディクションの発生というのは、非常に同じ土壌だということですね。

西山 もうちょっと補わないといけないかもね。・・・つま

り、表現形態がかなり違う、表出形態というかな。

信田 うん。もう一つね、アディクションっていうのは確実に自分を傷つける、ということですよ。で、暴力というのは他者に向かう。そういう意味では、自分に向かうか、他者に向かうかっていうところだよ。本当に自分に向かっちゃうと病気になっちゃう。自殺とかね。そういう意味ではアディクションっていうのはスレスレのところ、暴力にも行けず、病気にもならず、・・・うまい。うまいのよ。

西山 自ら発見した一つの延命策だよ。それこそ、サバイバル。現代の家族、企業もそうでしょうが・・・その、かすめ取るという言葉が人間社会の隅々までに入っているな、っていう印象は受けるんだよね。経済的に先が見えない、その大きな物語が凋落して非常に夢がない状態っていうか・・・目標が見えない、そういう不安とは別の、もう一つの行き詰まり感っていうのがあるんじゃないか。「自分のせい」ではないという言い方が出てきているんですね。ある意味でみんなが被害者になってくるという事態がある。被害者意識がみんなの中に強く出てきている。私のせいによって苦しいのか他者のせいによって苦しいのか、分からないけれども、今の状態は自分のせいによって由来するのではない・・・そういう気持ちがある。よく由来が見えていない・・・見えてくれば明快に何をすればいいのか、分かるんだけど。そういう気持ちが多くの人々に共有されている状態について、かすめ取られるという言葉キーワードにして考えると見えるものがあるかもしれない。

信田 西山さんの方がよっぽど難しい話してるじゃん(笑)で、それとアディクションと、どう関係するの。

西山 敵が見えないからアディクションになっていく、対象になるものが見えてくればね、アディクションにならない。ひょっとすると殺人事件になるかもしれないけれど。

司会 対象が見えれば、問題解決手段も構築できるだろう、



原宿カウンセリングセンターでの対談風景。
この日の対談はおよそ2時間半に及んだ。

と？対象が見えないその、ぼんやりとした不安の中でアディクションに陥っていく、という意味ですか？

西山 ええ・・・家族の中の支配なり、その支配の構造が見えてくればね。怒りが立ち上がってくるだろ？なぜこんなことにずっとこだわっているかって言うとね、私は1970年の世代、だからかもしれない。怒りの対象が社会であったというところが、見えたときはね、アメリカはけしからんとか資本主義はけしからんって感じで。明快さがあつたからね。いまは、どこに何が・・・

司会 僕らの世代はみんな、あの時代の人たちはお気楽でよかったなって言ってますよ。

信田 アハハハ・・・。言うわねえ、それ。

最後は自分で引き受ける

西山 そのお気楽とは何かと言ったら、自分の問題、モヤモヤをだねえ・・・（笑）一直線のライン上で処理をする単純さですね。あの時代はそれしかなかったのか・・・それにすぎたということかも知れないね。イデオロギーとかね。

信田 私はね、ACもその流れだと思っているのよ。ACブームもね。つまり、あれは親のせいだって、いう風にして、つまり自分のモヤモヤとした、その不全感というか、そういうものが、社会体制や階級の矛盾であるということから、パーツときて、親のせいだ、家族のせいだって。で、最近はADHDだと。片付けられないものはみんな、私の脳の中に（笑）。そうすると自分の不全感に根拠が見つかる、人はやっぱり救済されるわけでしょう？そういう形としてACがあつたのは私は否定できないと思うんですけど、やっぱり自分がわけの分からないものに脅かされたり、力を奪われていくという実感だけは、あるんですね。

司会・・・ちょ、ちょ、ちょっといいですか？

信田 何か言いたくなつたのね。どうぞ（笑）

司会 AC・・・についてですが、僕の父はアルコール依存症で、ACっていう定義に添えば典型的なACだと僕は思うんですが、ACっていうそのひとつの言葉でも、解決できない、ボク的には非常に解決できないものが残ってしまうんです。

信田 何を解決したいの？

司会 漠たる不安というか、漠たる不全感というか、あるいは、大きな挫折を経験してしまった自分自身の受け入れがたさ、というか・・・。ACという言葉に結びつけたところで、結局、そこでいつまでも、なんか、親のせいにしていても仕方がないなっていう・・・。

信田 よくあるAC批判の典型ですねえ。

司会 むしろ自己批判なんです。いつまで親のせいにしていたらいいのかなって・・・

信田 対象化できないときに、その対象である親に愛着を感

じたり、尊敬を感じちゃったりするとか、やっぱり全否定できないときに、すごく苦しいですね。

司会 そうですね。親のことは必ず、どこかで大切にしたいと思っている。

信田 そのことと親のせいにはできないというのはつながっていますね？

司会 はい。

信田 なんで親のせいにはできないの？

司会 そうですね・・・本当にこれは、僕自身の中の自己矛盾なんです。

信田 うーん・・・

司会 信田先生がおっしゃったように、薬物を摂取するということは、ある種の反社会性を自ら引き受ける行動でもあるわけです。薬物という逃避手段を選んだのは自分であって、親のせい薬物を選んだわけではない。その選択をしたのは自分なんだ、という。

信田 プライドですね？

司会 は？ プライド、ですか？

信田 「薬物を選んだのは僕なんだ」というのは、ひとつのプライドじゃないですか？

司会・・・ヤク中になつたのは自己責任なんだっていうふうに、いつかは引き受けていかねばならないというか・・・

信田 「自分のせいじゃない」と西山さんがおっしゃっていることにつながるのね。あなたのせいだと・・・つまり自分のせいだというその責任がね、やり取りされているわけでしょう。親のせい薬物の中になつたんだっていうのと、ヤク中になつたのはボクが選んだんだ、とこう、ありますよね。最後は自分がヤク中を選んだんだっていうことに、辿り着いてそこから回復していくんだと私は思っていますよ。ACの回復もね、親のせいだということから始まって、最後は自分で引き受けていくんですよ、なにかを。

司会 ああ、ようやくストーンと落ちました。

信田 私もこの部屋でACのグループカウンセリングをやっているんですよ。ACグループのやることは、さっき西山さんがおっしゃった「対象化」ということですよ、親を。親がひとつの、自分にとっての加害者だったと認めたんは認めて、とことん親を徹底糾明していくとですね、すると、それと違う自分というのが立ち現れてくるんです。

司会 ああ、それは思い当たりますね。

信田 そうか、ヤク中になつたのはボクなんだよ！っていうのが出てくるんです。だから、ACっていうのはそこまでのプロセスの問題なんです。薬物をやってきた過去をずーっと言わせる、あなたがやってきたことは虐待の結果なんだっていうことを、十分、十分、十分にミーティングで話させて、そして、引き受ける、ということをやらせる。刑務所、矯正施設でも、ミーティングの形で取り入れられる方法だと思えますね。私が何人かお会いしている性的犯罪の加害者の人た

ちも、同じようなプロセスを辿るんですよ。統計的にはよく分からないんですけども、ある人の場合は一年間掛かりましたね。富永さんの場合、親から受けた虐待の経験をずっと語ることで、「でも薬物やったのは結局、自分だよな」「刑務所に服役したりして親を悲しませたな」って思えるまでにどのくらい時間掛かりました？

司会 あっ、僕、刑務所入ってたの内緒にしたかったのに！まあ、いいや・・・（笑）。そういうふうに刑務所の中でも僕は考えてはきたんですよ。常にその、アンビバレンスというか。ある日はものすごい怒りが出てきたり、またある日はものすごく自虐的な後悔と反省に打ちのめされたり、その繰り返しでした。今は多少、落ち着いた状態ですけど、僕はまだ自助グループにつながってから8ヶ月です。もしかしたら、僕はすこし特殊かも知れない。

信田 そうですね。刑務所に入っていたからね（笑）。その期間をどうカウントするか、っていうのがあるわね。

司会 実は、僕は服役する前に12STEP（注）知っていました。ただ、自分の問題とは認めていませんでした（笑）。刑務所の中で散々にその意味を考えさせられました。

信田 なるほどねえ・・・ひとりでミーティングやってたんだ（笑）

司会 そうですね（笑）。聖書にかじりついたりとか・・・苦しかったですから。今にして思えば、随分おりこうさんな受刑生活だったかも。過労とクスリで挫折した元ジャーナリストということで刑務所もけっこう面倒みてくれましたし。でも、独房生活での「ひとりミーティング」が回復に役立つんだから、矯正施設がちゃんとしたミーティングを受刑者教育に取り入れてくれたらどんなに効果があるか、はかり知れないと思いますね。

信田 ふうん。やっぱりね・・・。

司会 あっ、スイマセン。また対談の腰を折ってしまった。

家族支配の3形態

西山 折ってないよ。ちゃんとつながっているよ。それで、家族の、さっき言った支配と暴力の関係ですよ。からめ取るという問題、もう一つは、暴力の問題がいま、出てきているよ。家族の中の暴力は虐待とDVという暴力。DVなんかもやっぱり、支配の一つの形態であると、ということですね。

信田 ただ、むつかしいのはね、そこでいろんな言葉を使うことは可能なんです。やる方からすれば、単なる所有感覚だっていうことも、あるわけね。僕のものでしょあなたは、それなのに、なぜ僕の言うことを聞いてくれないの、っていう感情ですね。暴力を振るう人たちって、すごい被害者意識で振るっているでしょう。

西山 どうして分かってくれないの？っていうことですね。

信田 虐待するお母さんたちも、同じですね。なんで私の生

んだ子どもなのに、私の思うとおりに育ってくれないの？って。あんたが生まれたお蔭で、私はツーリングも行けないし（笑）・・・キャバクラにだって俺は行けねえぜえ、みたいなね。そんな被害者感情で親は子どもを虐待するわけです。その、関係性はね、所有にする、というか・・・。わたしのものにする。からめ取るときにもね、「お母さんはね、あなたのことをわがことのように思っているのよ」って言うじゃないですか。それを世の中では美しいことのようにならないですか。「人のことをわがことのように思う」てのは。それはつまり、対象を自分の問題に取り込む。ここで、「所有」という問題にテーマが絞れてきたわね。

西山 信田さんが「所有」っていうときにボクがいつも思うのは・・・

信田 あ、しょーゆーことね（笑）

西山 くっ・・・（苦笑）私には日常的にニュースに触れながら監禁事件が、ずっと気になりますね。現実目の前に起きてくる事件としてね。新潟の監禁事件もあったけれど。家族の中で自分が受けた所有された関係を大人になってあらたに再生産する、というね。

信田 連鎖ね。

西山 家の中でペットのように所有されてきた関係の中でしか育ってこないと、また新たなペットをつくっていく。かすめ取るという手練手管よりも、実にシンプルな親子関係ですよ。子どものほうにも完全に、脱力っていったらおかしいけれども、完全に「お人形さん」になっちゃっている。

信田 うん、うん。

西山 かすめ取ることより、もっとね、頭脳プレーがない。家族の中で、にっちもさっちもいかない事態っていうのがあるのかな。多分、かすめ取るという親のテクニクすら欠いたペット化。ものを与えて飼育すればいいような関係。隷属化されたペット、動物のような存在が生まれているという認識を持ちますね。

信田 そうね。・・・そうすると、支配の三形態。暴力と監禁、かすめ取りっていうのは、どうでしょうか。3つ形態があるわけね。その中で、もっとも高度なテクを要するのが、かすめ取り。

西山 そう、このかすめ取りのテクニクは、かなりのもんだね。

信田 その次が暴力。これは、殺さないようにやんなきゃなんないからね。殴るにもボクシングのように、いろんなテクニクがあるじゃないですか（笑）それと同じでね。暴力にも高度なテクニクが必要。これは2番目ですね。3番目が監禁。最も無能な支配、ということになりますね。だんだんと単純化されてますね。

西山 単純化されてきてるんですね。

信田 それは、喜ぶべきことなのか、哀しむべきことなの

か。どっちですかねえ・・・。

西山 監禁の場合には、親の側に言語がない。つまりね、いま富永くんが、かすめ取られたっていうけれども、両親はそりゃ、上手にかすめ取るための言語を発していた、と思う。

信田 するとやっぱりそれは、その、1, 2, 3の順番は、言語の量の多さに比例するっていうことですね。

西山 多さというか、発語の仕方の問題でしょう。

信田 発語のね。

西山 ペットのようにカネやモノなり、スナック菓子を与えるだけ、という、ある意味で子どもへの関心を捨てているような・・・実はコミュニケーションの成立していない関係が自然状態になっているんじゃないか、と。

すき間風が吹く家族

信田 ...でもねえ。コミュニケーションって、なかなか成立しないわ。孤食の時代ですからね。ところで新潟の監禁事件の被告はギャンブル依存でしょう？馬券ばかり買っていたって・・・監禁ってのはね、監禁したらもう、それが常態になってしまう。監禁は、終わっちゃうでしょう？ギャンブルって、次から次へあるでしょう？アルコールも次から次、クスリも次から次へあるでしょう？人を監禁するっていうのは、アディクションの快感にはかなわないんだよ、きっと。一過性のものと、繰り返し摂取可能なものとね、やっぱり誘引力の違いっていうのかな、そういうの、あるんじゃないかな。ストーカーだって繰り返しはいるけれど、最後には追い詰めて殺しちゃうわけでしょう？だからやっぱり人を対象にすることと、薬物とか、ギャンブルを対象にすることとの違い、ですよ。だから、人を対象とする嗜癖っていったらいちおう共依存っていわれているんだけど、これは、さっきの言い方で言えば高度な、・・・かすめ取りっていうのが共依存ですから。やっぱりテクニックを使わないと、対人関係のアディクションっていうのは継続しないんですよ。虐待でもテクのあるお母さんは、ゼツタイに殺さないでやりますからね。分からないように。だから、表面化しない。

西山 監禁というのは、監禁された人が逃げていなくなるというね。そういうコントロールがあるかもしれない。

信田 でも、DVって、監禁じゃない。ある意味で。結婚も、監禁じゃない。すると、結婚はアディクションの装置、ということですね。

西山 ハハハハ・・・

アパリの同席者の声「・・・それを全部に当てはめてしまうのは・・・それはちょっと行き過ぎですよ(笑)」(注)

信田 いいですねえ(笑)そういう意見を言って欲しかったの(笑)

西山 家族の中から、アディクションが出てくる・・・ア

ディクションがあることによって家族が支えられている、という側面もあるかも知れませぬ。

信田 家族の支配はかすめ取り、暴力、監禁。かすめ取りには非常に巧妙なテクニックが必要。つまり、ハイテク支配。監禁はプリミティブ支配。あらゆる家族がそうである。結婚もそうじゃないか。そういう家族の支配が、アディクション発生装置になるといえそうね。

司会 そこまでは言いすぎじゃないですか。それを言ったら何もかも台無しになってしまうみたいで・・・(笑)

信田 でも比喻としてそれを言うこと、そういう視点で現代の家族をとらえなおすことで家族を見つめ直すひとつの鍵になるんじゃないかしら。

西山 1995年当時の対談で信田さんは「家族解散」というラジカルな意見を主張していたでしょ。それが最近はずいぶん薄められてきたような気がするんですよ。多分、中年の女性たちと接しておられて厳しい現実を見てきたからだと思うのですが。

信田 ずいぶん手厳しいことをおっしゃる。それには3つぐらいの理由があるんですよ。一つは不況かな。離婚を推奨できなくなった。離婚しても一人で生きていくための職がない。相手モリストラや退職金も減って慰謝料を取れない。それならうまく家族を利用するしかないでしょ。それと結婚なんてこんなもの・・・もともとが古来の日本の結婚なんて、足入れ婚でしょ？角隠し越しにそっと見て、いい男ならアタリ・・・結婚、家庭に重点を置いてしまうと息苦しい家族を形成する。だから二つ目はそれを解体する、というより、幻想を取り去って「夫婦や家族なんてこんなもの」とあきらめてしまう。三つ目はアディクションの回復者が形成した家族を見続けてきた影響があるわね。アルコールに始まるアディクションからの回復者が作る新しい家族像を近年、見出したからね。

司会 現在、アメリカで最も幸せなのは、酒にしる薬物にしる、アディクションからのソーバー(回復者)がいる家族である、という意見があるそうですが。

信田 うーん・・・それもまたアメリカ的な短絡思考という気もするけど。ただ言えるのは、コアな息苦しい家族の中に、第三者が入る、ということの必要性でしょ。

司会 自助グループの仲間がある日、ミーティング会場で家族の話をして怒り狂っている。だけど、ちがうある日には同じ彼が、ぼくは自分の家族を愛している、という話をする。非常にアンビバレントでしょ。そういう愛憎並存の生々しい感情を、自助グループという場で分かち合えずに、自分の閉鎖的な家族空間に持ち帰っていたら、どんなに苦しいか。

信田 自助グループって、いうなれば「精神的不倫」ですよ。ね？(笑)アル中の夫がAAにつながり、共依存の妻がアラノンにつながり、子どもがアラティーンにつながる。みなそ

れぞれ、そこで、息苦しくなった家族の「愛という名の支配・束縛」を断ち切って、精神的不倫をする。そういうことができることが大切なんです。

司会 精神的不倫ですか(笑)うまいことをおっしゃいますね。腹が立ったときには自助グループでパートナーの悪口大会(笑)。でも、苦しくなった家族内の空気を希釈するためのツールとしては、それぞれの自助グループにかかわるといのは理想的なんでしょうね。息子の薬物問題に囚われていた母親が、家族会の提案に従いヘロイン依存症の息子を「愛情ある突き放し」で立ち直らせたんですよ・・・本人はアパリで回復して、家族は家族会で回復する。それぞれに接点はないんだけど、それぞれに幸せ。そんなケースがありますね。あるいは、それは自助グループではなく、アメリカのように父、母、子どもたちがそれぞれのカウンセラーを持つ、そんな形でもいいのかも知れない。

西山 そうですね、アディクションの世界で生まれた家族観が、それぞれの家族内部に自然に浸透してきたのではないのでしょうか。私がキャスターをしている山梨放送のラジオ番組に出演していただいた信田さんが「すき間風が吹く家族」という発言をしたでしょ。それがいい意味でリスナーの反響を呼んだんですよ。どこの家族も関係がギクシャクする場面があるし、親子や夫婦関係に危うさがあるときに、「少々すき間があってもいいんだ・・・」という言い方に安心感を抱くことができたからではないのでしょうか。家族が主題として浮上したときに、家族の一体感や家族愛を強調する声がかれまでは脅迫するように聞こえてきたでしょ。ところが「あるべき姿」の家族と現実の家族は、既にズレてしまっているじゃないですか。家族ってホットなつながりでもなく、いつも全員集合で何かをする関係でなくてもいい、と突き放して思えると、ホント楽になりますね。

信田 山梨のような土地でそういう反応があったことにビックリしますね。不況真っ只中の東京では、いったいどうなんでしょうかね。「秋風が吹いてきて、ちょっと肌寒いけど、そこはかとなく幸せ」というのが私のイメージですね。家族の中に重心を求めろコアな家族は危ないですよ。これからは第三者を家族の中に積極的に入れるべきですね。富永さんが言ったように、それはカウンセラーでもでもいいんじゃないの。とにかく精神的な不倫をバンバンやるべきね(笑)。そして、モーニング娘ではないけど「日本の未来」の家族像をつくっているというプライドを持って、依存症の人たちは、回復努力を続けてほしいと心から思います。

(2002年11月30日 原宿カウンセリングセンターにて)

< 編集部注 >

- 注 ブロン・・・市販の咳止め薬。合法ドラッグの代表格。中高生の潜在的依存者数は莫大と言われている。
- 注 宅間守被告・・・宅間被告もアルコール依存症の父親から酷い虐待を受けて育った。
- 注 1 2 STEP・・・NAなどの自助グループの精神性を支える回復のステップ。アディクションに対する無力を認め、過去の自分の生き方を振り返り、自分の理解する神にすべてをゆだねていく。
- 注 奥津爾(おくつ・ちかし)・・・アパリスタッフの彼は子煩悩で大変な愛妻家である。

< 司会 >

富永滋也(とみながしげや)・・・アパリ東京本部で回復者スタッフとして相談業務ならびにフェロシップ・ニュース編集を担当。虐待トラウマとアディクションからの回復の道のりを歩んでいる。日本サイコセラピー学会員。

< 次回対談のお知らせ >

フェロシップ・ニュースでは、対談に登場していただいたゲストの方々のフェロシップを大切にします。

今回の対談のゲストの方に相手を指名して頂き、次回対談を実現するという形で、アディクションに関するさまざまな話題を披露していただく方針です。

信田さよ子さんご指名の次回対談相手は

上岡陽江(かみおか・はるえ)さん

(ダルク女性ハウス代表)です。

女性の視点からとらえたアディクションの問題を存分にお二人に論じていただきたいと思います。

読者のみなさま、どうぞご期待ください!

保釈中の刑事被告人に対する 薬物研修プログラム

特定非営利活動法人

アジア太平洋地域アディクション研究所
事務局長 尾田 真言

1 はじめに

初犯の覚せい剤自己使用事犯者の場合、薬物の所持量ないし取引量が少量の場合には、逮捕後2、3ヶ月のうちに判で押したように懲役1年6月執行猶予3年の判決が言い渡され、再び薬物のある社会に戻ることになる。しかし、覚せい剤取締法違反で検挙された者の約半数が再犯者であるというのに、逮捕 勾留 起訴 裁判 判決という一連の刑事司法手続において、薬物事犯の再発防止に向けた教育は何も為されない。たとえ保護観察執行猶予判決が下されたところで、執行猶予者保護観察法5条の制約上、特別遵守事項をつけることができないので、薬物治療の専門機関に行くことを義務付けることができない。そのため薬物を止め続けるための動機付けがなされずに、執行猶予期間中に再び薬物犯罪を犯して実刑になったり、精神障害が現われて精神病院の入退院を繰り返したりするという悲劇が数多く見られる。さらには保釈期間中に薬物を使用して再逮捕・追起訴され、初犯でありながら実刑になる人もいる。

そこで刑事被告人という緊張感のある立場であるうちに、なんとか薬物をやめるきっかけを提供することはできないものかと考えたアパリでは、2000年7月より、「保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム」を開始した。

このプログラムは、保釈中の刑事被告人に群馬県藤岡市にある薬物依存者のリハビリ施設に入寮してもらい、薬物依存者との毎日のミーティング（治療集会）を中心とした、規則正しい共同生活を行うことによって、薬物を使い続けた結果としての重度の精神障害の怖ろしさを知り、薬物使用に至った過去の自分の心的問題を内省して、薬物なしの生活を志してもらうことを目的としている。

2 保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラムの意義

本人の更生にとって、何よりも大切なことは、逮捕・起訴というせつかくの機会を薬と縁を切るために有効に利用することだと考えて、刑訴法93条3項が、保釈に際し「被告人の住居を制限しその他適当と認める条件を付することができる。」としていることから、アパリ藤岡研究センターを制限住居として保釈決定を得れば、否応なしに、薬物問題について学習し、規則正しい生活習慣を身につけ、日曜日を除いて、毎朝施設内で毎朝実施されているミーティング及び近隣のNA会場で毎晩実施されているミーティングに参加することを通して、今後の生活のあり方と、新たな価値観を身につけるための契機となる時間を過ごすことができるのである。

もっとも、刑事被告人に対する薬物研修は、刑訴法が「裁判所は、適当と認めるときは、決定で、勾留されている被告人を親族、保護団体その他の者に委託し、又は被告人の住居を制限して、勾留の執行を停止することができる」（95条）としていることから、保釈中だけでなく裁判所の委託を受けて実施する方法がある。この勾留の執行停止が薬物研修プログラムに適用されるのであれば、保釈金を用意できない被告人も参加可能と

なり、受講者の増加が見込まれるのだが、実務では、保釈でなければ、このようなケースで刑事被告人の身柄の拘束が解かれることはまずないと、よく弁護士から指摘される。プログラムの名称を「保釈中の……」としたのは、現状ではそれ以外の方法では許可が出ないからに過ぎない。

また、そもそも自ら薬物研修プログラムを受講しようという被告人については逃亡のおそれも罪証隠滅のおそれもないから勾留する必要がないという意見もあろうが、覚せい剤事犯については、素直に犯行を認めて薬物の入手経路を自白していても逮捕・勾留するという実務が定着してしまっている。

ところで、筆者は情状証人としての出廷時に裁判官あるいは検察官から、「なぜ裁判確定後ではなく、裁判中に刑事被告人に対して薬物研修プログラムを実施する必要があるのか」と質問されることが多い。これに対しては、「逮捕から判決言渡までの2、3ヶ月に及ぶ勾留期間が無駄であるし、何よりも社会復帰後に薬物を止め続けていくためにNAに参加することの重要性和、また、もし再度薬物を使ってしまったとき（これをリラプス<再燃>という）にアパリという受け入れ先があるのだということを知ってもらいたいから」と答えている。実際問題としても被告人が薬物研修プログラムを受講した事実が、薬物から縁を切ろうと努力していることを示す有利な情状として判決においてほとんどのケースにおいて裁判所から評価されている。

3 薬物研修プログラムの流れ

(1) 被告人側とのコンタクト

勾留中の被告人から手紙でパンフレットの請求や面会要求、あるいは、その家族、弁護士からの電話を受けると、パンフレット及びビデオを送付してプログラムの案内をする。アパリでは、プログラムを受講したいとの申し込みがあったとき、原則として被告人と留置場あるいは拘留所において、被告人との関係を身元引受人予定者、面会理由を近況伺い、あるいは「その他」の欄に端的に「薬物研修プログラム受講の意思確認」と記入して面会し、接見室の亚克力板越しにパンフレットを見せて、施設の概要及びプログラムの内容について、一般面会のごく短い時間（5分～20分）を使って説明している。一度も会ったことのない被告人について身元引受書を出すことはできないし、そもそも本当に被告人にプログラムの受講意思があるかどうかもわからない。警察署で、保釈になった被告人がいきなり出迎いの父親、弁護士、及びアパリ・スタッフに向かって、「なんでこんな奴を連れて来ているんだ、藤岡に行くなんて言っていないだろう。どういふつもりだ。」と怒号をはりあげたこともあった。これは明らかに被告人の意思確認不十分のケースだった。家族からプログラム受講の依頼があっても、実際に被告人に会ってみると「そんな施設に行くくらいなら、ずっと留置所にいる」、「自分には不必要だと考えるから帰ってください、パンフレットも受け取る気はありません」と言われたこともある。拘禁状態の被告人の精神状態は情報の受容力に欠けているケースが多く、このプログラムの有用性の説明についてはアパリのスタッフと弁護士、家族との協力態勢を敷くことが望ましい。

(2) 保釈申請

弁護士が保釈申請をする。その際、制限住居を群馬県藤岡市上日野2594番地アパリ藤岡研究センターとした申請をすることが多い。被告人が単なる薬物乱用者ではなく薬物依存者であった場合は裁判終結後にリハビリ施設への入寮が望まれるがその場合、判決言渡時の制限住居がアパリ藤岡研究センターであると、保護観察執行猶予が言い渡された場合には、前橋保護観察所の管轄となり、藤岡市の保護司がつくことになる。執行猶予が実刑が微妙なケース、あるいはほぼ実刑が予想される

ケースではそうすることで保釈が許可されることもある。

(3) 入寮

保釈許可が出ると、スタッフが警察の留置所あるいは拘置所に出迎えに行き、藤岡研究センターに同行する道すがらプログラムの内容について説明する。弁護士や親が藤岡研究センターに連れてくるケースもあるが、いずれにせよ入寮初日にガイダンスを行う。所持品検査を行い、万が一にも違法薬物が持ち込まれないように注意する。家族などから小包が届けられた際にもスタッフが必ず中身をあらためて同様にチェックする。携帯電話、財布を施設長が退寮時まで金庫に保管する。これは外部との連絡をさせないことで、自分自身と向かい合う静かな時間を確保するためであり、また、逃亡および薬物購入をさせないようにするためである。

(4) 薬物研修プログラムへの参加

精神疾患の治療のために近くの精神科のクリニックに通院して、病院の処方薬を飲んでいる重度の薬物依存症者が約半数いるアパリ藤岡研究センターに入寮して、ミーティングに毎朝、毎晩の1日2回出席し、その他の時間にも、食事作りや清掃作業といったボランティア活動や、随時実施されているソフトボールやバトミントンなどのスポーツプログラムを通じて、薬物依存症者と共同生活をするのがプログラムの内容である。まず何よりも入寮者の話を聞くことによって、薬物を使い続けたらどうなるのかという実例を目の当たりにしてもらおう。また逆に、薬物依存に陥っている人にとっては、自由の身になった後に正式に入寮するための布石となる。

原則的には研修プログラムへの参加は判決言渡日までということになる。そうすると通常は1ヶ月程度の藤岡での滞在となる。薬物研修プログラム受講費用は(5)の費用も含めて1ヶ月までは一律32万円となっている。また、毎朝のミーティング終了時に一日千円札一枚を生活費として支給している。施設では3食風呂付きだから、これ以上にお金がかかることもない。通常のリハビリ施設入寮費は月額16万円(ただし生活保護受給者はその額で受け入れている)だから最初の1ヶ月分だけ倍額となる。

(5) 薬物研修プログラムの受講状況報告書の作成、ならびに情状証人出廷

アパリでは筆者と藤岡の岸本純孝施設長が保釈中の身元引受人となり、身元引受書を裁判所に提出する。薬物研修プログラムの受講状況について、ほぼ毎日為されている東京 藤岡間の電話連絡で状況把握に努めている。筆者は薬物研修プログラム受講者に毎晩日記を書いてもらって週に一度程度FAXで東京本部に送ってもらい、心情の把握につとめている。被告人のプログラム受講状況の報告書は、被告人自身が自ら作成する場合、筆者が作成する場合、アパリ東京本部のスタッフが被告人をカウンセリングした上で作成する場合がある。誰が作成するかについては弁護人の方針により臨機応変に対応している。また、報告書に貼付できるように、スタッフが被告人の薬物研修プログラムの受講状況を日付の入るカメラで写真撮影している。また、必要に応じて、贖罪寄付を受け入れたり、裁判所に情状証人として出廷し、プログラムの受講状況あるいは、今後の見通し等について証言するなどの支援も行っている。

4 保釈プログラム受講者の成り行き調査

平成12年7月から平成14年12月までの約2年半の間に本プログラムを受講した被告人20名の成り行きについて別表のとおりまとめたが、今のところ、再犯者は1人も見あたらない。

ケース 、 、 、 、 の6例は実刑判決が確定した

が、その他の14例は執行猶予判決が出ている。そのうち6例()は、判決後にアパリ藤岡アウェイキングハウスに正式に入寮している(は収監直前まで)。

当初の予想とは裏腹に、受講者の約4割は同種前科のある者であり(ケース 、 、 、 、)、刑務所で服役経験のある者もいた(ケース 、)。

(懲役1年4月、猶予3年)や(懲役1年6月、猶予2年)のケースなどは、懲役1年6月・猶予3年が通例となっている初犯の薬物事犯の判決のなかでは異例といえるだろう。

最後に、薬物依存からの回復のためには、犯罪者扱いをするのではなく、自らに尊厳を感じる、自分を大切に思えるような環境が必要である。今後、わが国でもダメ絶対運動に代表される予防活動(一般予防)だけでなく、乱用者の回復をめざした再発予防の分野(特別予防)にも関心が向けられることを希望してやまない。

最後に(贖罪寄付について)

こうしたアパリの活動は、実は、刑事被告人からの贖罪寄付に大変助けられている。ひとたびは薬物依存者を作り出す立場にあった営利目的の薬物事犯者が、自らの行為を悔い改めて、少しでも薬物依存で苦しんでいる人たちの手助けをしたい、あるいは、若い人たちが万が一にも薬物に手を出さないように、中学校、高等学校などに薬物乱用防止教材を寄付したいということで、その資金をアパリに提供してくれる場合がある。また自己使用事犯者の場合でも、犯した罪の責任を取るために、贖罪寄付をするケースも多い。

贖罪寄付をすることが、裁判所から有利な情状として考慮されるケースは多い。第一審で、求刑を大幅に下回る判決が出たり、控訴審で原判決が破棄されて刑が軽減されることが良く見られる。

私たちは助成団体から研究費をいただくことはあっても、家賃、光熱費、人件費等のランニングコストについて、公的機関や企業からの援助は現時点では全く得ていない。経営は常に苦しい状態である。薬物依存者をひとりでも少なくしていこうという活動に皆様のあたたかい援助と協力を是非お願いしたい。



尾田真言(おだ・まこと)左から2人目。2002年11月6日、マイアミのドラッグ・コートにて。左端はロジネック判事。アパリ事務局長、中央大学兼任講師(刑事政策)。ダルクのボランティアとして家族会で無料法律相談を担当している。著書『人権論入門』日中出版『サラ金トラブル』日中出版など。

別表 保釈プログラム受講者の成行き

H14.12.10現在

逮捕時の職業・年齢	前科・前歴	被疑事実	求 刑	判 決	制限住居・プログラムの受講状況 ・現在の状況
40代男性	覚せい剤[前科3犯] (前刑満了後10年)	覚せい剤使用	2年6月	静岡地裁 1年6月実刑	制限住居は自宅、旅行許可で来所。逮捕時錯乱状態・精神病院入院歴あり。現在服役中
40代男性	業過・暴行 [罰金前科2犯]	覚せい剤自己使用、妻に注射、30g譲受	2年6月	・大阪地裁 2年実刑 ・大阪高裁 2年6月執行猶予5年保護観察付	保釈時の制限住居は自宅、藤岡へは旅行許可で来所。アパリ退寮後、大阪ダルクに通所。現在元の職場に復帰、NAに通う。
30代男性	大麻[前科1犯] (執行猶予期間満了直後)	覚せい剤使用、大麻栽培	2年6月	・大阪地裁 1年6月実刑 ・大阪高裁 控訴棄却 ・最高裁 上告棄却	保釈時の制限住居は自宅、土日のみアパリ藤岡研究センター宿泊。現在服役中
20代男性	[初犯]	覚せい剤所持・使用、大麻所持	1年6月	東京地裁1年6月執行猶予3年	制限住居 アパリ藤岡研究センター。制限住居変更許可により自宅に戻り、地元のNAに通う。現在フリーター
40代男性	覚せい剤[前科3犯] (前刑満了後9年)	覚せい剤所持(3g)、使用	2年6月	新潟地裁佐渡支部 2年執行猶予5年	保釈時の制限住居 アパリ藤岡研究センター。現在、会社社長&薬物依存リハビリ施設経営
20代男性	[初犯]	覚せい剤所持、使用	1年6月	東京地裁 1年6月執行猶予3年	保釈時の制限住居 アパリ藤岡研究センター。第1回公判日に制限住居を自宅に変更
20代男性	[初犯]	覚せい剤所持、使用	1年6月	東京地裁 1年6月執行猶予3年	保釈時の制限住居 アパリ藤岡研究センター。現在無職
20代男性	覚せい剤[前科1犯] (執行猶予期間満了後9ヶ月)	覚せい剤、所持3g	2年6月	・大阪地裁 1年8月実刑 ・大阪高裁 1年4月実刑	2審で初めて保釈された。保釈時の制限住居 アパリ藤岡研究センター。プログラム終了後大阪ダルク通所。現在服役中。
30代男性	賭博 [罰金]	覚せい剤 1.5g所持、使用、大麻樹脂1.6g所持	3年	大阪地裁 3年猶予3年	保釈時の制限住居は自宅、アパリ藤岡研究センターへは旅行許可で来た。現在無職。
30代男性	シンナー不処分、覚せい剤前科1犯(猶予期間満了後9年)	覚せい剤所持、使用	2年	札幌地裁 懲役2年猶予3年	保釈時の制限住居 アパリ藤岡研究センター。元の職場に復帰。
20代男性	[初犯]	覚せい剤所持4.7g、使用	2年	東京地裁 懲役2年猶予3年	保釈時の制限住居 アパリ藤岡研究センター。その後受験し、現在大学生。
20代男性	財産犯前科1犯(1年6月・猶予3年、猶予期間満了後1年)	覚せい剤所持0.3g、使用	1年6月	東京地裁 懲役1年6月猶予5年保護観察付	保釈時の制限住居 アパリ藤岡研究センター。薬物依存による精神病院入院歴4回、計8ヶ月あり、判決後、アウェイキングハウス入寮。現在、社会復帰。
30代男性	業過猶予、道交保護観察付猶予	覚せい剤使用	1年6月	・さいたま地裁 懲役1年 ・東京高裁 控訴棄却	第1回公判後6日間保釈されて来所。現在服役中。
20代男性	[初犯]	覚せい剤使用・所持1g	1年6月	東京地裁 懲役1年4月・猶予3年	保釈時の制限住居はアパリ藤岡研究センター。鬱病・トラウマ、判決後、アウェイキングハウス入寮後、求職活動中。
30代男性	[初犯]	覚せい剤使用	1年6月	東京地裁 懲役1年6月・猶予3年	保釈時の制限住居 アパリ藤岡研究センター。執行猶予判決後アウェイキングハウス入寮、現在自宅にて求職活動中
20代男性	覚せい剤 (前科1犯)	覚せい剤・大麻	2年	・東京地裁・懲役1年6月 ・東京高裁・棄却	2週間入寮後、地元のNAに通う。実刑確定。
30代男性	覚せい剤 (前科1犯)	覚せい剤	2年	・福岡地裁・懲役1年6月 ・福岡高裁・棄却	2審段階で1ヶ月保釈された。1年分入寮費前払済み。現在服役中。
40代男性	[初犯]	覚せい剤	1年6月	横浜地裁1年6月・猶予3年	保釈時の制限住居 アパリ藤岡研究センター。執行猶予判決後退寮
20代男性	[初犯]	覚せい剤、大麻、麻薬	1年6月	神戸地裁1年6月・猶予3年	保釈時の制限住居 アパリ藤岡研究センター。執行猶予判決後アウェイキングハウス入寮
30代男性	[初犯]	麻薬使用	1年6月	東京地裁 懲役1年6月猶予2年	保釈時の制限住居 アパリ藤岡研究センター。執行猶予判決後アウェイキングハウス入寮

体験談 エイキチ（38歳）

この体験談を書くにあたって自分は、できるだけ正直になりたいと心から思っています。

自分は、覚せい剤取締法違反で3回の逮捕歴があり、刑務所に2回服役しています。今年二月に満期出所して現在、薬物依存症からの回復のための生活をアバリで送っています。

16歳のときから船員をしており、外地でときどき薬物を使用していました。自分は賭け事が大好きで、その頃はギャンブルの集中力や高揚感を増すために薬物を使っていました。ある頃から幻聴や妄想がはじめて、ギャンブルは止めましたがクスリは止まらず、しだいにセックスや自慰行為など性的快楽を高めるためにクスリを使うようになりました。

心の中ではいつも罪悪感を感じていたのに、そのたびに自分の行動を正当化してきました。「自分の身体、そして自分の金でクスリを使って何が悪い？」頭の中でいつも自分自身にそう言い聞かせてきました。

今回、二度目の刑務所を出所した後も、塙の中で知り合った組関係の二人と組事務所やホテルを泊まり歩き、クスリを使い続けていました。7日間、薬物と性癖に耽る日々を送ったりもしました。頭の中では分かっていた・・・このままではダメだと。でも、自分の力ではどうすることもできませんでした。それが、つい最近までクスリを使用していた自分の、本当の姿です。

実は自分は、薬物依存症のほかに、アルコール依存症という病気も持っているのです。その治療のために精神病院にも2ヶ月間、入院しました。入院中にもクスリを使用して、入院から4日後には幻聴と妄想に襲われ、仲間を病院に呼び出して乱闘しました。そのために病院を強制退院させられました。それから1ヶ月間、私の底つき体験だったと思っています。

病院の方々、当時お世話になったダルクの仲間、自助グループの仲間には本当に、大変な迷惑を掛けてしまいました。クスリを入手するための段取りを仲間につけさせたり、仲間とクスリを使ったり、一番してはならないことをやってきてしまった。でも、「その何がいけないんだ」と同時に考えているような、馬鹿な自分でした。

そんな自分でも、仲間の一人である「Iさん」は、見放さなideいでくれました。時には自分のうちまできて注射器を持って帰ってくれた。3回も、そんなことをしてくれた。それなのに、Iさんが帰った4時間後にはまた、クスリを入手していました。正座をして、涙を流してわびたこともありました。それでもクスリとの縁は切れなかった。

最後の底つきの思い出は、ダルクのフォーラムの前日、クスリを使ってテンパった（緊張・興奮状態になった）状態で、自

助グループのミーティングに参加したときのことで、仲間の前で自分は震えていました。仲間の顔や目を直視できませんでした。汗ばかりダラダラかいていました。ミーティング終了後にIさんに厳しく言われました。「正直じゃない。今までのことをまだ全然、正直に吐けていない」と。翌日はダルクのフォーラムでした。当日も、仲間と約束していた時間にはクスリを使っていました。心配した仲間が電話やメールをくれたとき、「今から行きます」と口では言いながらも、幻覚や妄想、そしてそれまでにはなかったひどい鬱に襲われていました。自分はもう何もかもなくした・・・仲間、そして施設・・・どのようにしたら死ぬるか、2日間そればかり考えていました。蒲団の上で天井を見たま、今までの人生、生まれてからのことが走馬灯のように思い出されました。家族、友人、仲間。大切な仲間の顔と、その心。今までの人生と生き方を反省しました。あの2日間が本当に底つきだった。これ以上、大切なものを失うわけには行かないと痛切に思いました。

刑務所に入る前の25歳の頃にも考えたことはありました。このままの人生、生き方では、自分自身がつぶれてしまう。そして、社会から抹殺されて、惨めな人生を送ることになるのではないか・・・いや、現実にならなくなっていくに違いない・・・それが分かっているながら、どうして変えていけなかったのか。



施設の掃除や料理当番の中心になっている。

それは、クスリの病気そのものにも関係は当然あるのでしょうが、自分にとっての問題の根本は「生き方」そのものにあったと今では思っています。はじめは、クスリさえ止めれば人生なんてどうにだって生きられると思っていました。しかし、一番大切なことは生き方を、自分の日々の行動そのものを変えていくことだと気がつきました。

「生き方を変えたかったら、それなりの覚悟をしる」

仲間にそう言われたことがありました。はじめは理解できなかった。それよりも「何が生き方だ」「何を言っているんだ」と思っていた。今になって、やっとその意味、そして大切さに気が付き、本当に真摯に考え、毎日を送っています。

クスリを止めたら好きなように生きられるのではない。生き方を変えなければ、クスリは止まらないのです。それがようやく理解できました。でも、生き方や行動を根本的に変えていくことは容易ではありません。1年や2年でできることではないでしょう。

仲間は自分に「つらいよ」と言います。しかし、今の自分にとって施設生活は、それほどつらいことではないように思えます。たしかに今もつらいことはあります。この先だってもっとつらいことは降りかかってくることでしょう。それは覚悟しています。自分自身のために。勝ち負けと言っては語弊があるかも知れませんが、今までの人生に自分は負け続けてきました。今後の人生では、自分自身に勝ちたいと思っています。

日々、生き方を変え、行動を変えていく。それを意識し続ける

家族の手記 (GORI)

私の二つ年上の兄は薬物依存症です。今はアパリの施設に入寮しています。

私が暮らす家族に「薬物」というものが入り込んできて、混乱した生活が始まったのは私が高校生の頃でした。今から20年以上前のことです。私には兄が二人居てその二人とも薬物を使う仲間に囲まれていました。はじめは遊び心・興味半分だったんだと思います。実際にもう一方の兄は今薬物とは関わりのない生活を送っています。しかし当時高校生、大学、社会人へと歩んでゆく私にとって、同じ屋根の下で生活する場所に注射器が転がっていたり、咳止め薬の空箱や空き瓶がゴロゴロしていたり、そんな部屋の中で閉じこもって学校にも通わず、仕事もしないで生活する兄弟を見続けてきたことは私の心の中に大きな影響をもたらしました。

私が生活する生活圏は、みんな兄の薬物依存者としての行動に侵されていきました。昼夜逆転の生活で夜中ガレージでかまわず音を立てて作業をし、昼間はそのガレージで寝ている姿を見て、私は近所の目が気になって、惨めな恥ずかしい

だけでも、いろんなことが自分の身に起こります。それは、時には「信頼」という形で現れます。それが一番だと思っています。自分自身に対しても、仲間に対しても。

この頃、身体共に本当に気持ちがいい、充実したときを過ごしている自分に気付くことがあります。覚せい剤を使っていたときの快楽は、頭とハートを「ズキーン」と直撃するものでしたが、日々の生き方を変える努力は、ナチュラルな心地よさを与えてくれます。変えられた部分は、今までの病んだ生き方のほんの1パーセント程度かもしれませんが、薬物の快感とは全く違う、本当に心身にしみわたるような良さを感じています。自分みたいな「ボン中」の回復には、自然体が一番です。それが本当に必要だったということに気がつきました。

今は覚せい剤やアルコールを打ったり飲んだりはしていません。しかし毎日、朝から晩まで耳鳴りがしています。それは自分でしてきたことの結果です。本当につらいですが、仕方がありません。それよりも、少しは人間らしい「こころ」に近づいてくれたこと、仲間、家族、友人、そして自分自身に感謝しています。

回復や、新しい生活への自分なりの希望はたくさんあります。しかし今は、生き方、そして行動を変えるために頑張っています。「今日一日」という気持ちを忘れてたくありません。回復していく仲間を施設や自助グループで見ると、マイナスからでも、そしてこんな自分でも、人生のやり直しがきくことを確信しています。自分のために、そして毎日パワーをくれる仲間たちのために、歩んでいきたいと思えます。

思いでその目から逃れるように家から出入りしました。近隣の店に「後でお金は持ってきます」といって帰ってくる兄に何回もお店から催促の電話が鳴りました。レンタルショップやレンタカー屋から高額な延滞料金の請求書が届きました。私は自分の生まれ育った街でこれからも生活することは出来ないだろうと思いました。すべてが私の考える生活、人の生き方、家族のあり方と正反対の方向へ進んでいく気がして、私は兄を恨みました。兄のすることを止められずいつも尻拭いをしてやり過ごす母を恨みました。そしてそんな家庭を見て見ぬふりをして毎晩酒を飲んで遅く帰ってくる父を恨みました。私の父は外では事業を成功させ、社会的地位もある立派な人でした。そして小さい頃から私たち兄弟に酒に酔って言い続けました。「俺のような男を目指せ。尊敬する人を尋ねられたら『父です』と答えなさい」と・・・。

そんな中で育った私は学校を時間をかけて卒業し、何とか社会に出て、今はネクタイを締めて、普通の社会人のような

顔をして働いています。そして今から3年前の35歳のときにダルクの家族会として兄弟姉妹の集まる自助グループに参加し始めました。

はじめは自分の存在を「薬物依存症者の兄弟です」と自己紹介していました。兄弟としてどんな被害にあり、どんな惨めな気持ちだったか、将来がどんなに不安か、そして親兄弟をどんな風に恨んでいるかを話し続けました。しかしそれを、同じ体験を持った仲間が黙って耳を傾けてくれるまま話し続けていったとき、自分の気持ちの中に何か違和感のような、何かしっくりこない後味の悪さのようなものが芽生え始めました。そしてだんだん、薬を使わない自分だけが善で薬を使っている兄が悪だという図式に疑問を持ち始め、その間違った考えに愕然と気づかされることになりました。

私と、兄との違いは薬と出会うきっかけが在ったか無かったかだけで、同じ心の問題を抱えて生きてきたということ。同じ生き辛さを抱えて今日まで生き延びてきた同士だったということです。機能不全の家族で、父や母が自分の抱えた問題を弱い立場の子供達に押し付けたり無視したりする中で、自分の人生と命をかけてそのゆがみを表現する役割をむしろ兄が担ってくれた。兄弟の中で一人だけが社会的に悪とされる行動をとる事で悪役を買って出ざるを得なかった……。生き辛さの中でもがき苦しんで溺れそうになってやっとの思いで掴んだ命綱がたまたま薬物だったんだろうと思うんです。一方の私は何も理解しないまま、兄の薬物の問題だけを責め続け、兄の問題に目を向けることで、自分自身の問題から目をそらし自分を誤魔化して生きてきました。そして自身の問題に直面しないで自分を取り繕って長い間生活し続けたことで、私は疲れ果て困惑し、憔悴した状態で家族の自助グループに辿り着きました。兄の薬物の問題だと当たり前のように決め付けて「それさえなければ家は・・私は・・それさ



幼い頃の写真。中央が筆者。

えなくなれば・・」と考えていました。

自分の問題だと気づかされた時から私は「薬物依存症者の兄弟です」と自己紹介することは出来なくなりました。

ミーティングに通い続けて次に私を愕然とさせたのは私自身の心の硬さでした。長い間自分の問題から目をそらし、他人を、家族を恨んで生きてきた私の心が氷のように硬く凍りついていて、頭で理解していても同じ行動を繰り返してしまうことでした。

家族の中で兄を裁いてきたように、社会生活の中で人を裁き、ミーティングの仲間を裁き、違い探しをして人を否定し自分の非を否認し表面だけを取り繕っているから、いつも自分が優れず、機嫌が悪い……。自分の謝った考えに気づき取り返しのつかない行動で人を傷つけたことを知り愕然として涙をいくら流しても、その手は今までと同じように他人を傷つけ、気がつくとも恨みの感情で怒りを誰かにぶちまけていました。理解して反省しても行動が以前と変わらない自分を見せ付けられたときはとても落ち込みました。私が心の根に持ってしまった恨みの習慣は自然に解きほぐされることは無く、自分の病気とその深さ、これからの道程の長さを知りました。

これらのすべてのことは自分自身でどこか心の奥底で認識していたんだと思います。でも見たくないから否認してどこかに追いやって誤魔化して生きてきた。そしてそれはやっぱり長く続かなかった。私は導かれるべくしてこの依存症という世界、自助の仲間という場所に辿り着いたんだと思います。導いてくれた見えない力に感謝です。

私が傷つけて壊してきた大切な人達との時間を取り戻すことは出来ません。自分自身の過去の行いも取り戻すことは出来ません。でも私自身がこの病から回復し、同じような環境の人たちに話をして次の世代に恩返しをすることなら出来ると思います。是非やってみたいと思います。「回復は生きる喜び心の自由」という言葉をもらいました。薬を止めることではありません。私は恨みの感情と良くない行いのスリップを繰り返してしまいます。このスリップが完治する事が回復なら私にとって回復は無いと思います。でも生きる喜びを感じ取ることと、自分がどうあっても許すことが出来る心のやわらかさを持つことが回復ならば、私にも出来ると思いました。言葉をくれる仲間に感謝です。そして兄弟の私に代わって、施設で兄の言葉を聞き、言葉を与えてくれるすべての仲間に感謝します。

自己を見つめる男たちの姿は美しい - アパリ藤岡施設体験記 -

埼玉県立大学助教授（生命倫理） 五條しおり



医療福祉系の大学に勤めるようになってから、人文系の研究者も文献研究に止まらずフィールドをもつことが必要だという思いが強まっていた頃、たまたまある学会で、恩師から息子さん（尾田真言先生）が薬物依存者を援助する仕事についていることを聞いた。これはいい機会かもしれないとアパリ東京本部を訪ね、十数年ぶりに恩師の息子さん（尾田真言先生）にお目にかかった。

そこで薬物依存症についての説明を聞きながら、私は引きこもりの学生や、人間関係のトラブルから深く傷ついて「死にたい」を連発している学生、拒食症から抜け出せない学生たちも根底のところ薬物依存者と似た問題を抱えていることに気づいた。彼らをアパリの施設に連れて行き、薬物依存症の方たちが回復へ向けて闘っている姿を見せれば、彼ら自身の悩み・苦しみについてヒントを得たり勇気づけられたりすることがあるかもしれない、おまけに私のフィールド探しにも役立つ、というわけで、今回のアパリ藤岡施設訪問に踏み切ったのだった。残念ながら、私の念頭にあった学生たちは、その鬱症状ゆえに出て来ることができず（だから「引きこもり」なのだが）、参加した学生は、好奇心とボランティア精神に溢れる元気な学生たち（男子学生二人と女子学生四人）だった。

〔エピソード1．部屋の大掃除〕

藤岡施設では入所者たちと炊事をしたり話したりしてくれればいいと言われ、私たちは気楽な気持ちで出かけた。最初にやった仕事を除けば、確かに楽しく暢気な体験だったと思う。

施設に着いて最初に泊まる部屋に案内されたとき、私たちはギョッとした。部屋の隅には蛾や羽虫など昆虫の死骸が堆積し、トイレは汚れ放題、押入れには長い間干していない蒲団が積まれてあったからだ。女子学生たちは狂ったように掃除を始め、部屋はみるみるきれいになっていった。私たちの部屋だけでなく、廊下を含めた施設全体にも掃除の痕がみられなかった。ボランティアで最初にやるべき仕事は施設の掃除だと考えた学生たちは、掃除機を借りに行った。しかし、掃除機がなかなか見つからない。長い間待ってやっと出てきたのは半ば壊れかけた掃除機だった。この広い施設に小さな掃除機がたったの一台！確かに入所者たちには施設の掃除より優先すべきことがたくさんあるだろう、だから掃除が行き届かないのは理解できても、まともな掃除機がないのは納得できない。施設の財政はそれほど切迫しているのだろうか、心のケアが大切な施設こそ快適な環境を整える必要があるのに政府からの援助は受けられないのだろうか、と歯がゆい思いがしたものである。

〔エピソード2．グループ・ミーティングの傍聴〕

二十数人の男たちが一同に会し、自分の胸の内を語る光景は私に不思議な印象を与えた。私は日本の男性が、酒の席以外では自分の内面を語るのをあまり見たことがない。三日目のミーティングのときまでに、私の違和感は完全に消滅していたが、弱さも含めて男どうし心の内を見せあっている彼らの姿は、いい意味で私に衝撃を与えた。施設の自由で開放的な雰囲気の中にいるからこそ、彼らは語るができるのだろう。語りはときに心の負担を軽くしてくれる。

それにしても日本のほとんどの男たちは、「男は黙って...」というツツパリの美学の中に自身の苦悩を閉じ込め、一生を送るのではないだろうか。施設にいる彼らも、幼いときから少しでも自分の苦しみを語る習慣ができていれば、状況は変わっていたかもしれない。日本で中高年の男たちに自殺が多いのも同じ理由からだろう。訓練されなければ自身のことを語るができない男たちをパートナーにせざるをえない日本の女性たちも、また不幸である。

〔エピソード3．星空を眺めながら徹夜のおしゃべり〕

第一日目の夕食後、女子学生たちはアパリの仲間たちとトランプをした。それがきっかけで警戒心もとれ、私たち一同は夜、アパリのメンバーたちと屋上に上がり、美しい夜空と藤岡の街の夜景を眺めたのだった（アパリの藤岡施設は山の上にある）。その後、女子学生たちは満天の星空を眺めながら、徹夜で仲間たちと人生談義に花を咲かせたらしい。

翌朝、彼女たちが興奮した面持ちで前夜の話をするのを聞いたとき、彼女たちもまた、彼ら（自身のことを語るのが下手なはずの日本男性）が正直に胸の内を語ってくれたことに感銘を受けたのではないかと思った。「星空に酔って、私たちも熱くなってしまう」とSが詩人のようなことを言い、掛け蒲団が埃っぽいと蒲団を触るのさえ渋っていたKは、星空談義の後、部屋に戻り蒲団をすっぽりとかぶって寝たと言う。彼女たちがいち早く施設をまるごと肯定できたのは、施設の中に漂う独特の寛容さゆえだったろう。入所者たちは「ここを早く出たい」と言っていたが、女子学生たちは「帰りたくない」と言った。私にとっても、藤岡施設は日頃の義務を忘れさせてくれる居心地の良い空間だった。

〔エピソード4．スポーツで打ち解けた男子学生〕

男子学生二人は初め元気がなかった。初日の夕方、二人が食堂に入っていくと、一癖ありそうな兄さんたち（中には刺青をした人もいた）がたまたま食事中で、彼らの鋭い視線を一身に

浴びた二人は縮み上がってしまったのだ。二日目の午後、体育館でのバドミントンの試合で本領を發揮し接戦をものにするまで、二人の緊張は解けなかったようだ。スポーツの効用というべきか、三日目の野球で二人とも居場所を見出した様子だったが、この三日間で二人が何を思ったか、後でゆっくり感想を聞いてみたい。

ボランティアといいながら、掃除以外何もせず、ただ話をし、耳を傾け、食事をし、スポーツを楽しみ、くつろいだ三日間だった。そこで生活する入所者たちは、「薬物常習者」のイメージ（先入観）とは違って愛らしく、実年齢よりもはるかに若く見え、無邪気で繊細、義理と人情に厚く、淋しがり屋のくせに突っ張った感じがした。女子学生たちもみな同じように感じたというから、私の印象にはある程度の客観性はあるだろう。しかし、子どものような無邪気さは危険性も孕んでいて、それが裏目に出れば、自我肥大と自信過剰と無責任につながりかねない。

アパリに関わるようになれば、また別の印象も出てくるに違いない。ここで出会った人たちがみな無事に施設を出、新たな人生を踏み出してくれることを願っている。施設長の岸本さん、尾田先生、クルマでの送り迎えをありがとうございました。



スポーツプログラムに学生たちと参加して

ここで性急に結論を出すことは控えておこう。今後継続的に

アパリからのお知らせ

アパリ会員を募集しています！

アルコールや薬物、ギャンブル、買い物依存など様々な依存症でお悩みの方々、医療・教育・司法・マスコミの現場で働いているの方々、依存症という病気について、ともに考えてくださるの方々、APARIの活動に関わってください！フェロシップ・ニュースを始めとするさまざまな情報をお届けします。依存症に関する相談にも随時、無料で応じています。年会費はわずか12,000円（月額1,000円）です。ビール一杯、タバコ一箱を毎月我慢して、APARI会員になって下さい。それは、あなた自身の回復の第一歩です！

フェロシップ・ニュースの編集に協力してください！

アパリ東京本部 フェロシップ・ニュース編集部
 電話 03-5830-1790
 FAX 03-5830-1791
 E-mail apari@tokyo.email.ne.jp

フェロシップ・ニュース編集部では、投稿して下さる方の原稿を募集しています。依存症本人の体験談から、アディクション業界に関わっているドクター、ワーカー、ライターの方々の投稿まで、執筆希望の方は編集部までご一報下さい。写真持ち込み大歓迎です。

編集を手伝ってくださるボランティアの方を大募集しています。アディクションの世界に興味を持っている学生さん、編集部にご連絡下さい！

次回の目玉企画に乞うご期待！！

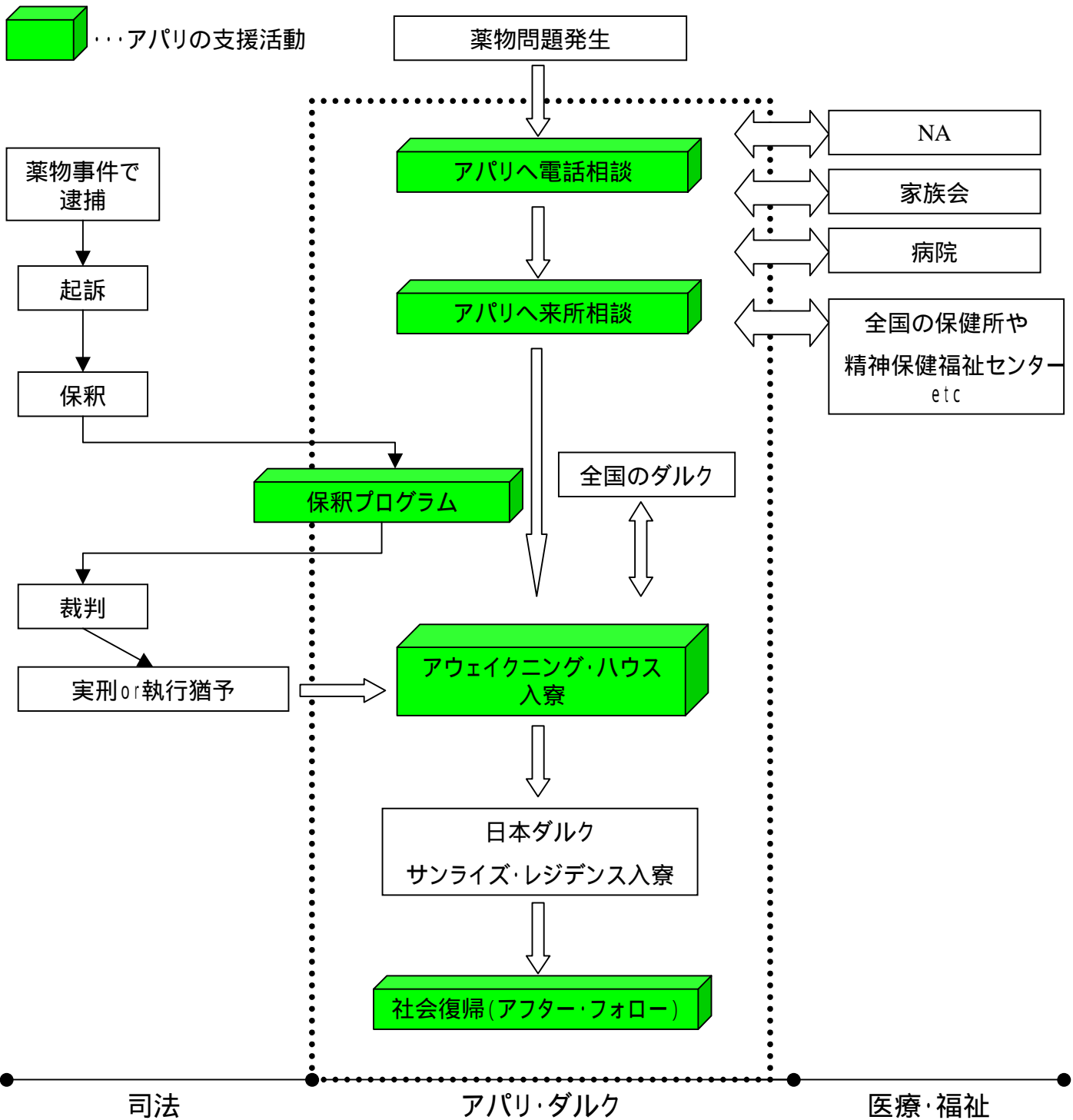
本号に登場して下さったカウンセラーの信田さよ子さんと、ダルク女性ハウス代表の上岡陽江さんの対談を予定しています。

アパリストッフは学校講演を引き受けます

薬物依存症から回復したアパリのスタッフ、小学校や中学・高校での講演を引き受けます。薬物依存の苦しみを経験した体験者たちの話は、「絶対にダメ」という押し付け型の指導よりもリアリティに満ちていて効果的だと評判です。

薬物依存症からの回復チャート

* このページにはアパリがイメージする回復の道のりを図示してみました



上記の図は薬物問題発生から社会復帰まで、アパリが関与する支援活動を図示したものです。薬物問題へ迅速に対応するには司法・医療・福祉にまたがる様々な機関との連携が必要なことを、この図は示しています。アパリやダルクのような民間のリハビリ施設のスタッフはもちろん、弁護士、保護司、裁判官、保健婦、ケースワーカー、医師等、立場を超えた人々の協力があって、はじめて薬物依存症の回復への道が開けるのです。

電話相談から社会復帰まで

アパリへ電話相談

薬物関連問題の初期介入は、家族や周辺の人からの電話相談から始まることがほとんどです。ここでインテークを行い、状況に応じた情報提供を行います。

電話の内容は相談機関や医療機関、リハビリ施設を紹介して欲しいというものから、薬物事件の法律相談など、その内容や緊急度は様々です。電話相談へ至る経路としては、インターネットで直接調べて電話する方、全国の保健所、精神保健福祉センター等で紹介された方などがいます。

アパリへ来所相談

電話相談後、スタッフと面会し今後の対応について話し合います。薬物依存者本人の同意があれば、ここでアウェイキングハウス（アパリが運営する薬物依存症リハビリ施設）への入寮の手続きを行います。また、家族には家族会や自助グループへの参加を勧めています。

アウェイキング・ハウス入寮

薬物依存症のリハビリ施設であるアウェイキング・ハウスに入寮します。ここでは1日1回のミーティング（集団療法）と夜の自助グループへの参加の他、スポーツや陶芸、農作業などのプログラムをおこないます。薬物依存症からの回復を目指す入寮者と集団生活することによって、健全な生活サイクルを取り戻します。

アパリへ電話相談をして入寮につながる方々の他に、精神病院や他ダルクから紹介されて入寮してくる人もいます。逆に、アウェイキング・ハウスから他地域のダルクに移ったり、本人の状態に応じて病院に移るケースもあります。司法関係者と密接な連携を図ることによって、執行猶予判決後や出所後に薬物事犯者を施設に受け入れ、治療につなげることを可能にしています。

日本ダルク サンライズ・レジデンス入寮

サンライズ・レジデンスは、アパリやダルクの回復プログラムからの卒業を間近に控えた仲間たちのための社会復帰支援プログラムです。ここでは就労プログラムを提供しています。都会から離れた場所にある施設からいきなり社会復帰するのではなく、東京都内の施設で徐々に生活基盤を固めながら、順調な社会復帰を目指します。

社会復帰（アフター・フォロー）

アパリ東京本部では、社会復帰した後もいつでも事務所に立ち寄ることのできる雰囲気づくりに務めています。回復者達が社会復帰後、様々な困難に遭遇した際、気軽に立ち寄って相談できる場を提供することで、問題を一人で抱え込まないようにするためです。また、緊急時（クスリの再使用やサラ金問題等）にはスタッフが迅速なアフターケアをし、問題の早期解決を図ります。

医療・福祉分野との連携

NA（ナルコティクス・アノニマス）参加を提案

NA（ナルコティクス・アノニマス）とは薬物依存者本人のための自助グループです。日本では34以上のNAグループがあり週に100箇所以上のミーティングが開かれています。電話相談にしろ、来所による相談にしろ、依存者本人とコンタクトをとった際には必ずNAのミーティングへの参加を提案します。また、アウェイキング・ハウスの入寮者は群馬県前橋市や高崎市で開かれている地域のNAミーティングに参加しています。

家族会との連携

薬物依存者本人が薬物の問題を抱えているように、依存者の家族には共依存という関係性の問題や、裁判や借金などの法律問題を抱えているケースが少なくありません。こうした問題の解決のために家族の方々には、家族のための自助グループや家族会への参加を勧めています。

医療との連携

精神病院からの退院患者をアウェイキング・ハウスで受け入れています。病院で解毒した後、すぐに社会に戻るのではなく中間施設のアウェイキング・ハウスを利用してもらうことで、よりスムーズな形の社会復帰を支援します。必要に応じてアパリのスタッフが病院まで車で出迎えてアパリまで送迎しています。

アウェイキング・ハウスから病院に入院するケースもあります。薬物の問題以外の精神症状があらわれた入寮者には、提携している病院の医師との相談のうえ、本人に入院を勧めます。医療の専門知識のない施設では提携病院との協力関係が不可欠です。そのため、入寮者のかつての主治医や担当ワーカーさんたちとの情報交換を密に行っています。

司法との連携

保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム

このプログラムは、薬物事犯で逮捕・起訴された刑事被告人に対して保釈中に薬物研修を行い、回復を目指す薬物依存者との集団生活や自助グループへの参加、各種作業療法を通して薬物なしの健全な生活態度を取り戻してもらうプログラムです。このプログラムでは担当弁護士と密接な連携をとりながら、被告人の再犯防止と回復への動機付けを支援します。このプログラムに参加した被告人の中には、執行猶予判決後、自らアウェイキング・ハウスに入寮し、回復のためのリハビリ生活を選択する人もいます。

刑務所を出所後、アパリへ

アパリでは刑務所から出所した薬物事犯者を受け入れるなどして、更生保護の分野でも大きく貢献しています。担当の保護観察官及び保護司と協力して彼らの依存症からの回復と社会復帰を支援します。時にはアパリの役員が身元引受人になり、受刑者と手紙のやり取りや面会をする場合もあります。

サルでもわかるアディクション講座

- アディクション?ミーティングって何?? -

トルルルルル・・・ガチャ

相談員 はい。アパリ東京本部です。

サル もしもし。どうも、サルです。そちらはアパリさんですか？

相談員 は、はい。どうも、はじめまして。

サル はじめまして。実は、ご相談したいことがあってお電話しました。・・・ボク、シャブがやめられなくて困っているんです。インターネットで調べたら、どうやらボクは「アディクション」ってヤツらしくて・・・どうか、ボクにサルでもわかるように、その「アディクション」ってやらを教えてください！

相談員 はぁ・・・。とにかくあなたは今、覚せい剤がやめられなくてお困りなんですね。わかりました。私にできることなら力になりましょう。

サル ありがとうございます！！それで、早速なんですけど、そもそも「アディクション」って、いったいどういう意味なんですか。

相談員 アディクション(Addiction)という言葉には、「のめり込む」とか、「おぼれる」という意味があり、「嗜癖(しへき)」と訳されています。何かにハマってしまい、それをやりたい、やりたくないに関わらず、本人の意思ではコントロールできない状態のことを指します。「依存症」とほぼ同義で使われていますね。

サル ??ウキ?ウキキー!!

相談員 落ち着いてください。ようは「やめたくてもやめられない」という状態のことです。

サル あ～、なるほど。はじめからそう言ってくださいよ。じゃあ、シャブに限らず、なかなかやめられないものって他にもありますよねえ?パチンコとか、お酒とか・・・。

相談員 そう。だからアディクションも3つに分類されています。一つ目は「物質への嗜癖」、これはアルコールやドラッグなどがやめられないこと。二つ目は「行為への嗜癖」、ギャンブルやショッピング、摂食行動や仕事などが該当します。そして三つ目は「関係への嗜癖」、共依存や虐待、DVなど人間関係へ依存してしまうことです。

サル 「物質」「行為」「関係」か・・・。沢山あるんですねえ。じゃあボクはシャブなんで・・・。

相談員 「物質への嗜癖」です。そして、対象が物質であれ、行為であれ、人間関係であれ、これらの嗜癖問題はすべて、その人の心の中の空虚感を埋めることが発端になっています。サルさんは何年前から覚せい剤を使っているんですか？

サル 8年前からです。ボクは上野動物園の出身なんですけど・・・上野って売人多いじゃないですか。パクられそうになった売人が檻の中にパケを投げてきたんです。はじめは好奇心でした。でも、徐々に使う量が増えて・・・。3年前、とうとう動物園を脱走したんです。今は猿回しをやって生計を立てていますが、調教師からもらうバナナはみんなシャブに変わってしまいます。何度もやめようとしているのですが、どうして



もやめられなくて・・・。ボク真剣にクスリやめたいんです！何とかしてください！ウキキー！

相談員 サルさん、落ち着いてください。いいですか。アディクションは病気なんです。サルさんがシャブをどうしてもやめられないように、何かののめり込む習慣がエスカレートしていくと、やがてコントロール不能の状態になることがあります。依存症という名前がつく段階になると、本人の意思の力だけで嗜癖から抜け出すことは不可能なんです。自分一人でこの問題を解決しようとしなくて、同じ薬物をやめられない悩みを持つ仲間と一緒に回復を目指しましょう。・・・ちなみにサルさんは、今まで病院やダルクのような民間のリハビリ施設に行ったことはありますか？

サル サルに保険はききません・・・お金がかかって病院には行けません・・・ダルクもけっこう入寮費がかかるんですよね・・・。

相談員 わかりました。それでは、まずミーティングに行ってみましょう。それならお金はかかりません。

サル ミーティング? 何ですかそれ？

相談員 サルさんのように、クスリを「やめたくてもやめられない」仲間たちが集まるNAというセルフヘルプ・グループ(自助グループ)があります。そのミーティングに参加するんです。

サル ボク今、代々木公園の森の中に住んでいます。今日、さっそく行ってみたいんですけど、そのNAのミーティングってどこに行けば参加できるんですか？

相談員 今日だったら・・・にある 公民館でやってみますね。

サル ああ、 公民館ですね、わかりました。さっそく行ってみます。ありがとうございました。それじゃ!!

相談員 あっ。

- ガチャ

- 翌日

トルルルルル・・・ガチャ

サル もしもし、アパリですか？

相談員 はい、そうです。

サル アディクトのサルです。

相談員 はい、サル。

サル ミーティングに行ってみたんですが・・・。それが・・・自分には合わないというか・・・、正直言って、よくミーティングの意味がわからなかったんです。薬物依存者が集まって言いつ放しの話をして、何か意味があるんですか？ 変なお祈りもしてましたし・・・。ちょっと気持ち悪かったです。そもそも「セルフヘルプ・グループ」って何なのでしょうか？

相談員 なるほど。気持ち悪かったですか（笑）。まあ、1回のミーティングで全てを判断するのは早計です。聞いてください。そもそもセルフヘルプ・グループ（自助グループ）とは「共通の問題を抱えている者同士が支えあい、問題解決を図ろうとするグループ」のことで。

サル はぁ・・・。

相談員 セルフヘルプ・グループには援助者や指導者がいるわけではありません。参加している人は「今日一日だけ、をやめよう」ということを目標に集まっているメンバーです。自分の体験や感情をわかちあうことで、自分の問題に気がついたり、自分を変えていく勇気をもたらすのです。

サル 確かに司会の人はいましたが、指導者みたいな人はいませんでしたね。でも、それって本当に効果あるんですか？ むしろボクは、お医者さんやセラピストの先生にちゃんとカウンセリングしてもらって早くクスリやめたいんですけど。

相談員 焦ってすぐに結果を欲しがるのはアディクトの特徴ですね（苦笑）。効果はゆっくりと静かにしか表れません。援助者との安定した関係の中で行われる治療やカウンセリングと、同じ問題を持つ人同士ならではの「わかちあい」、それぞれの持ち味があるのだということを知っておいてください。そして勘違いして欲しくないのですが、セルフヘルプ・グループに行きさえすれば全て解決するわけではありません。

サル 効果はゆっくりですか・・・焦っちゃダメってことですね。でもボク、すぐにクスリやめたいんです。それから、グループの中に猿はボクだけなんで、みんなを仲間と思えないんです。

相談員 繰り返しますが、すぐに結果を求めないでください。「自分はこのグループの一員だ」という感覚が出てくるまで時間がかかることがあります。サルさんのように参加しはじめの仲間はすぐにグループの空気に馴染めず、居心地も良くないと感じる場合が多いようです。他の仲間との違い探しをしてしまうのですね。でも、みんな同じアディクトです。「1回でこの場所が危険であると判断しないで、少なくとも6回は参加してみましょう」と多くのグループでは提案されています。とにかくミーティングに出続けてください。そのうちに少しずつサルさんの意識も変化してくるはずですよ。メンバーの話を聞き、自分の話をする。そうしているうちに少しずつ仲間意識が芽生えてくるでしょう。そして、セルフヘルプ・グループにつながっているというその感覚、つまりグループへの帰属意識こそが、回復の大きな原動力になるのです。

サル 「グループへの帰属意識が回復の大きな原動力」です

か・・・わかるようなわからないような・・・。納得いかない話をする人もいたし・・・。あとミーティングは聞き放しなんですよね、質問したり意見を言っちゃいけないから、イライラするんです。

相談員 ミーティングで話されたことは、個人の意見として受け入れてください。いろいろな段階のメンバーが自分の話したいことを話すので受け入れられないことも出てきます。いいですか、これだけは忘れないでください。「持ち帰りたいたいものだけ持ち帰り、受け入れられないものは置いて帰る」のです。納得いかない話は、ミーティング会場に置いて帰ってください。ミーティングが終わったあと、お茶を飲みに行ったり、食事に行ったりする「フェローシップ」の時間があります。その時は質問したり、意見を言ったりしていいんですよ。

サル 「持ち帰りたいたいものだけ持ち帰り、受け入れられないものは置いて帰る」か・・・。

相談員 参加者の全ての発言が受け入れがたい話でしたか？ 中にはサルさんの心に響く発言もあったのではないですか？

サル はい。ボクと同じような体験をしている人もいました。猿みたいな人もいましたし。

相談員 ミーティングにしばらく通ってみましょう。まずは続けることです。サルさんははじめの一步を踏み出したんです。

サル わかりました。ボクにはもう後がありません。アパリを信じてミーティングに通ってみます。こうやってサルにもわかるように「アディクション」のことを時々教えてください。

相談員 いいですよ。聞きたいことがあったらいつでも電話してください。

サル ありがとうございます。それじゃ、ウキキー！



構成 : 奥津爾（アパリ東京本部スタッフ）

アドバイザー : 西村直之（アパリ沖縄ファミリーセンター代表
精神科医 医学博士）

安高真弓（ウィメンズオフィス・サーブ代表
心理士 精神保健福祉士）

参考文献 : 西村直之・安高真弓 共著
『薬物問題を持つ家族のための家族教室/
家族用テキスト』NPO法人アパリ

神無月才生の好評連載 第2回

ラブ&マーシー

ビーチボーイズ：
ブライアン・ウィルソンの光と影

ビーチ・ボーイズのデビューのきっかけは、両親の3日間の休暇だった。

1961年9月、ロサンゼルスに近いカリフォルニア州の住宅街、ホーソン。グッドイヤー社に勤めるマリー・ウィルソンは、妻とメキシコを旅するに当たり「食べるものを買うように」と150ドルを子どもたちに手渡した。

少年たちはそれを元手にギターやドラム、アンプを借り、録音を始める。マリーの三人息子、ブライアン、デニス、カール、彼らのいとこのマイク・ラブ、ブライアンの同級生アル・ジャーディン。この五人が吹きこんだのは、ブライアンが高校の授業で作った「サーフィン」という曲で、当時、カリフォルニアの若者に浸透しつつあったサーフィンの楽しさを屈託なく表現した、テンポのいいナンバーだ。

休暇から戻って来たマリーは言い付けを破ったことに腹を立て、長兄のブライアンを殴打したという。だが「サーフィン」は地元のレーベルの目に留まり、思いがけずデビューを果たすことになる。ローリング・ストーンズと並ぶ長寿バンドの誕生だ。

オリジナルメンバーの役どころは次の通り。

ブライアン・ウィルソン（長男19歳）＝ヴォーカル（高音）、ベース
 デニス・ウィルソン（二男16歳）＝ヴォーカル（中音）、ドラム
 カール・ウィルソン（三男14歳）＝ヴォーカル（高音）、リードギター
 マイク・ラブ（いとこ20歳）＝ヴォーカル（低音）
 アル・ジャーディン（友人19歳）
 ＝ヴォーカル（中高音）、リズムギター、ベース
 （ただし、アルは一時バンドを離脱）



19才の頃のブライアン・ウィルソン。

両刃の剣

メンバーすべてがリードヴォーカルを取れる力量を持ち、声域がそれぞれ異なることから、同じメロディーを全員で歌っても、ハーモニーがうまく重なり、広がりある音像を生み出した。翌年、大手のキャピトルに移籍して、シングル「サーフィン・サファリ」が全米チャートのトップ20に食い込み、63年春に「サーフィンUSA」が発表される。

カリフォルニアの名だたるビーチを歌詞に織り込んで、波が押し寄せるようなバックコーラスを配したこのナンバーは3位まで駆け上がった。初期の彼らの楽曲は「サーフィンUSA」に代表されるサーフィンと、若者のカーライフを描いたホットロッドに大別される。ファッションショーのように季節合わせて、春夏はサーフィン、秋冬はホットロッドと、フル回転でシングル、アルバムを送り続けた。

ほぼすべての曲を作曲し、プロデュースを手掛けたビーチ・ボーイズの核、ブライアン。プロの作曲家の手になる楽曲をアイドルが歌うスタイルが当たり前だったこの時期、あどけない表情を残す弱冠20歳の天才の出現に業界は驚愕したはずだ。

下積み経験がほとんどない彼らがこれほどスムーズに成功したのは、初代マネージャーの父マリーの存在が大きい。そして、それは両刃の剣でもあった。順風満帆に見える船出もマリーがバンドの方針を決めていたところに最大の問題をはらんでいたからだ。

元々音楽家志望だったマリーは、執拗なほどにレコード会社やDJに息子たちを売り込んだ。そして、ブライアンを脅し、すかし、ときに笑みを浮かべて「生かさず殺さず」の状態ですべての曲を書かせた。

届かぬ思い

日本では「サーフィンUSA」のイメージが強く、陽気な印象を持たれがちだが、「ロンリー・シー」や「イン・マイ・ルーム」「ユア・サマー・ドリーム」などの初期のスローナンバーを聴くと、すでにメロディーから、はかなさを通り越えた、痛みのようなものを感じ取ることができる。触れるとすぐに割れてしまいそうな、手作りのガラスを思わせるデリケートな感覚。

人間が繊細になったり、用心深くなるのは理由、それなりの体験が背景にあると思う。ブライアンは後に「ブライアン・ウィルソン自叙伝」（径書房、中山啓子訳）で、幼いころからマリーに虐待を受け続けてきたことを打ち明けている。

「父は幼児の僕をアパートの外のコンクリートの歩道に投げ捨てた」「角材で僕の背中を力いっぱい打ち続けた」。今から半世紀も前にアメリカの家庭で起こっていたドメスティックバイオレンスだが、父が与えた屈辱は肉体的なものにとどまらず、精神的なものにも及んでいた。ある日、マリーは新聞を床に投げ捨て、ブライアンに排便するよう命じた。むせび泣きながらブライアンがした便を、マリーは妻のオードリーに見せ、満足げな笑みを浮かべたという。

ブライアンはそのときのことをこう記す。「心の傷は一生癒えない。僕は母が助けてくれなかったことを許せない」。別の日には、マリーは義眼を外して、幼いブライアンに自分の目を「見る」と促した。「肉だ」。「さくらんぼ色の剥き出しの肉が見え、まるで殺人を目撃したかのように狂乱して泣きわめいた」。

もちろん、愛憎あいまみえるという表現があるように、いびつではあったが、父の愛、子のあこがれというもまた、両者の間で存在していたようだ。人の感情とは妙なもので、虐げられたり、いじめられたりした相手にほど、実は自分のことを見てもらってほしかったり、ほめてもらいたかったりするもの。悲しい過去がいいと言うのではないが、独特のセンチメンタルな作風は、少年時代の記憶と届かぬ父への思いが無関係ではないように私には思える。

新鋭現る

ビーチ・ボーイズがスターになっても、マリーは「もう1人のプロデューサー」として録音現場に通い続けた。ステージママならぬ、ステージパパの草分け的な人だ。「迫力がない」「満足できない」「取るにたらん、ガキの歌だ」-。難癖をつけ、ことあるごとに自作曲をプレイするように迫る父に困惑し、辟易しながらも、ブライアンはヒット曲を連発し続けた。

その集大成が64年の初めに発表したシングル「ファン・ファ

ン・ファン」だろう。軽快なギターのイントロ、明るいさびのコーラス、張り裂けるようなファルセットボイス。「初めてナンバーワンが取れるかもしれない」。しかし、その夢は思わぬ原因でついでた。

「ファン・ファン・ファン」は5位まで上昇してストップ。同じ週、1位から4位までは「シー・ラブズ・ユー」以下、すべてビートルズが独占したからだ。

海を渡ってきた新鋭は、あっさりと王冠を奪い取った。これ以降、数年にわたりビーチ・ボーイズとビートルズは激しいチャート争いをするようになるが、たった1人で何もかもやり、未曾有のモンスターグループと張り合わねばならないプレッシャーは、ブライアンの心をむしばんでいく。ドラッグへ行き着くのに、そう時間はかからなかった。

<筆者プロフィール>

神無月才生(かんなづき・さいせい)

音楽・映画評論家。1969年生まれ。英米のロック・ミュージックや香港映画シーンの切り口鋭い批評で知られる。コアな映画ファンの間では彼の自作ホームページが大人気を博している。(神無月才生のホームページは <http://plaza.harmonix.ne.jp/~skz/> です)

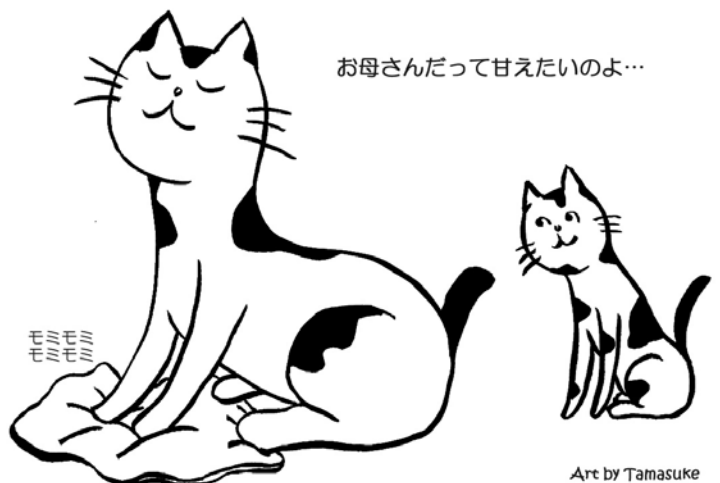
「ネコさんに学ぶ」 ウィメンズオフィス・サーブ代表 セラピスト 安高真弓

「今日は鍋にしようか」という言葉が沖縄でも飛び出す季節になりました。寒くなるとパソコンの前に座る私の膝の上やイスと背中との隙間は、我が家のネコさんたちの指定席となります。私には「猫寄せ」という、特別な能力があるのです。

小さい頃から、私は動物が大好きでした。祖母の家の牛に自分で刈った草を食べさせたり、有精卵をもらってきて自分で温めたり(失敗しました...)、ふくろうのお母さんをしたり。小学校で飼われているウサギや七面鳥の世話も、長い夏休みの楽しみの一つでした。いろいろな動物との出会いの中では何を考えているかわからない猫よりも、感情表出の豊かな犬の方が好きだったのですが、なぜかネコさんとのご縁が一番長く続いています。

「私には猫寄せの能力がある」などと書きましたが、そんな能力は存在しません。ネコさんは、自分の欲求のままに動きます。私のことが好きでたまらないから来るのではなく、寒いから温かい私の膝や足元に来るのです。温まると、「あー、あったまった〜」とあくびをしながら、遊びに行ってしまう。イヌのように芸をしたり、飼い主に愛嬌をふりまいたり、可愛いがられようと画策して膝に乗ったりすることはありません。「トイレが汚い」「お腹が空いた」「淋しいから撫でろ」「うるさい」「水をくれ」ネコさんの主張はシンプルで、自分に正直です。他人に自分の姿がどう写るか、自分がどう思われているかなどとは考えません。自分の要求が汲んでもらえると満足して、またどこかに遊びに行ってしまう。騒音を好まないネコさんは、ドタバタしながら掃除を始めると、静かで安心できる場所にそっと移動して行きます。そして静かになったら、いつの間にかそばに戻ってきます。ネコさんは、「距離をとる」という人間関係では至難の技を、実にさりげなく見事にこなします。

おっぱいを飲んでいた子ネコの頃の名残らしいのですが、ネコさんには布団や毛布など柔らかいものをうっとりしながら「モミモミ」する習性があります。寒い晩には、するすると布団の中に入ってきて私のお腹をうっとりしながら「モミモミ」しています。「必要な時だけ」という、一見そっけなく見える関係は「この人は、私に悪いことはしない人」「親ネコのような存在」という絶対的信頼感があるからこそ成り立つのです。私も、悲しくなったり淋しくなったりすると柔らかくて、ふわふわしていて、温かいネコさんを抱っこして元気を分けてもらいます。いつもべったり一緒にいるわけではありませんが、私たちは仲良しです。必要な時に、さりげなく、そっと寄り添える相互関係のお手本はネコさんなのかもしれません。



アパリ藤岡 アウェイクニングハウス

アウェイクニング・ハウスは、アジア太平洋地域アディクション研究所（アパリ）が運営している薬物依存症からの回復施設です。

回復のためのプログラムは、自助グループ（NA＝ナルコティクス・アノニマス＝）の手法を取り入れたグループ・セラピーが中心です。入寮者が全員参加するミーティングを毎日行っているほか、夜には地元で行っている地域のNAミーティングに参加しています。

このほか、入寮者が自主参加する形で、スポーツ・プログラムや農作業、陶芸、ボランティア活動など、さまざまなプログラムを行っています。

薬物依存症になる人のほとんどが、対人関係が苦手な自分だけの世界に引きこもったり、なにかに依存することで心の葛藤を解決しようとする傾向を持っています。施設では、同じ苦しみと闘う仲間をつくることで孤独感を解消しながら、ミーティングで正直に自分の話をすることで薬物依存に陥った自分自身の心の問題を内省してもらっています。

東京からJRと車で2時間半。群馬県藤岡市の自然の山々に囲まれた施設で、薬物乱用で荒廃した精神状態を安定させ、病的依存から回復・自立できるような環境と援助を提供しています。

【入寮条件】

- 1、薬物依存から回復・自立をしようとしている本人
- 2、男性（年齢制限はありません）

【入寮期間】

3ヶ月、6ヶ月、12ヶ月の目安はありますが回復の度合いは個人差があるため特に定めません。

【入寮費】

16万円（生活保護受給者は応相談）

内訳	施設使用料（共益費含む）	¥60,000
	食費	¥30,000
	生活費	¥35,000
	プログラム・カウンセリング	¥35,000

アウェイクニングハウスの各プログラム



スポーツプログラム



ミーティング風景



農作業プログラム



陶芸プログラム



アパリ藤岡研究センター

〒375-0047

群馬県藤岡市上日野2594番地

電話0274-28-0311 FAX0274-28-0313



アパリ東京本部

〒110-0015

東京都台東区東上野6-21-8サニーハイツ東上野1F

電話 03-5830-1790 FAX 03-5830-1791

Email apari@tokyo.email.ne.jp

http://www.ne.jp/asahi/npo/apari/

年間購読料5000円 領価1部500円